



特11
231

002659-000-0

特11-231

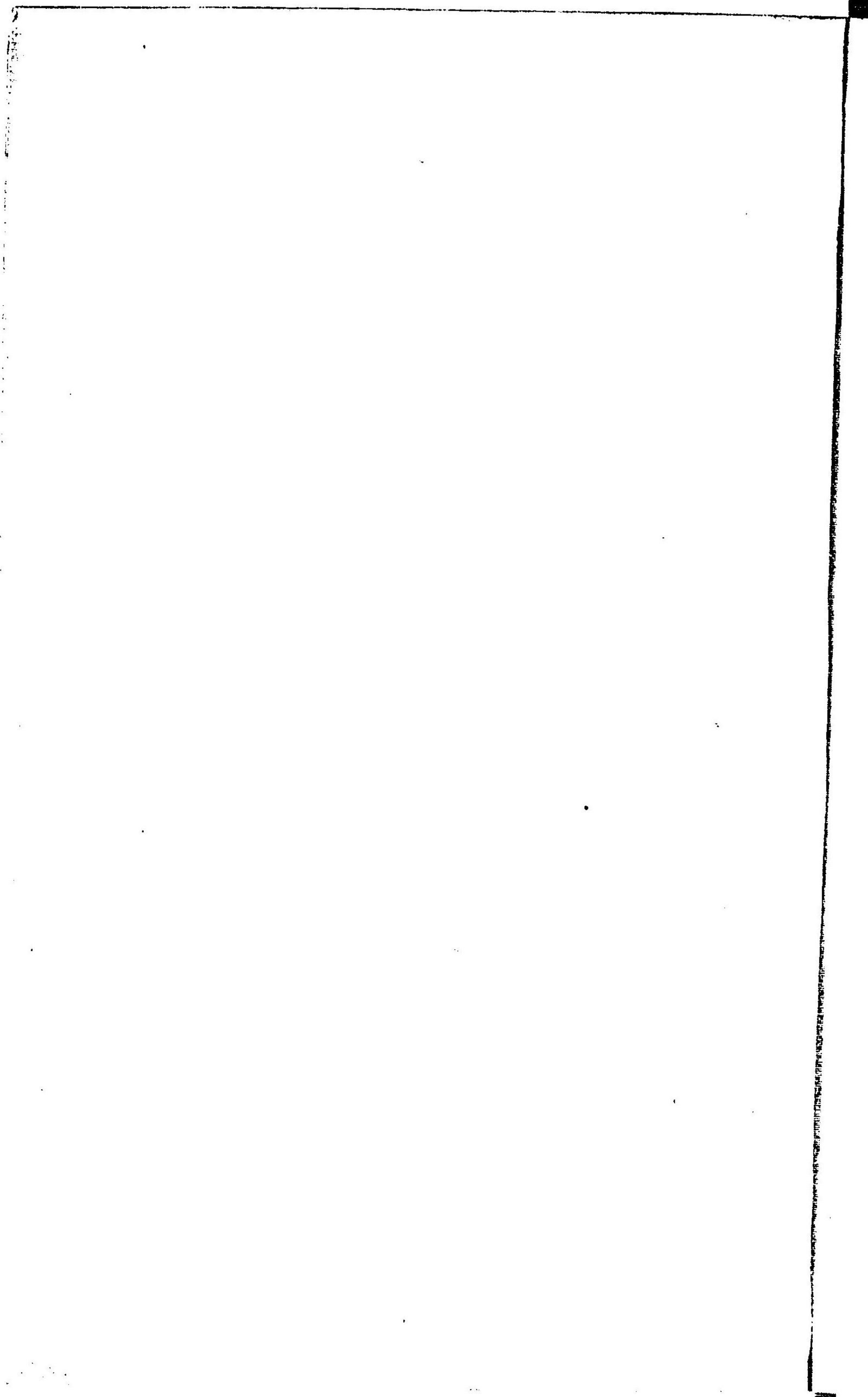
日清大戦争 (戦場目撃)

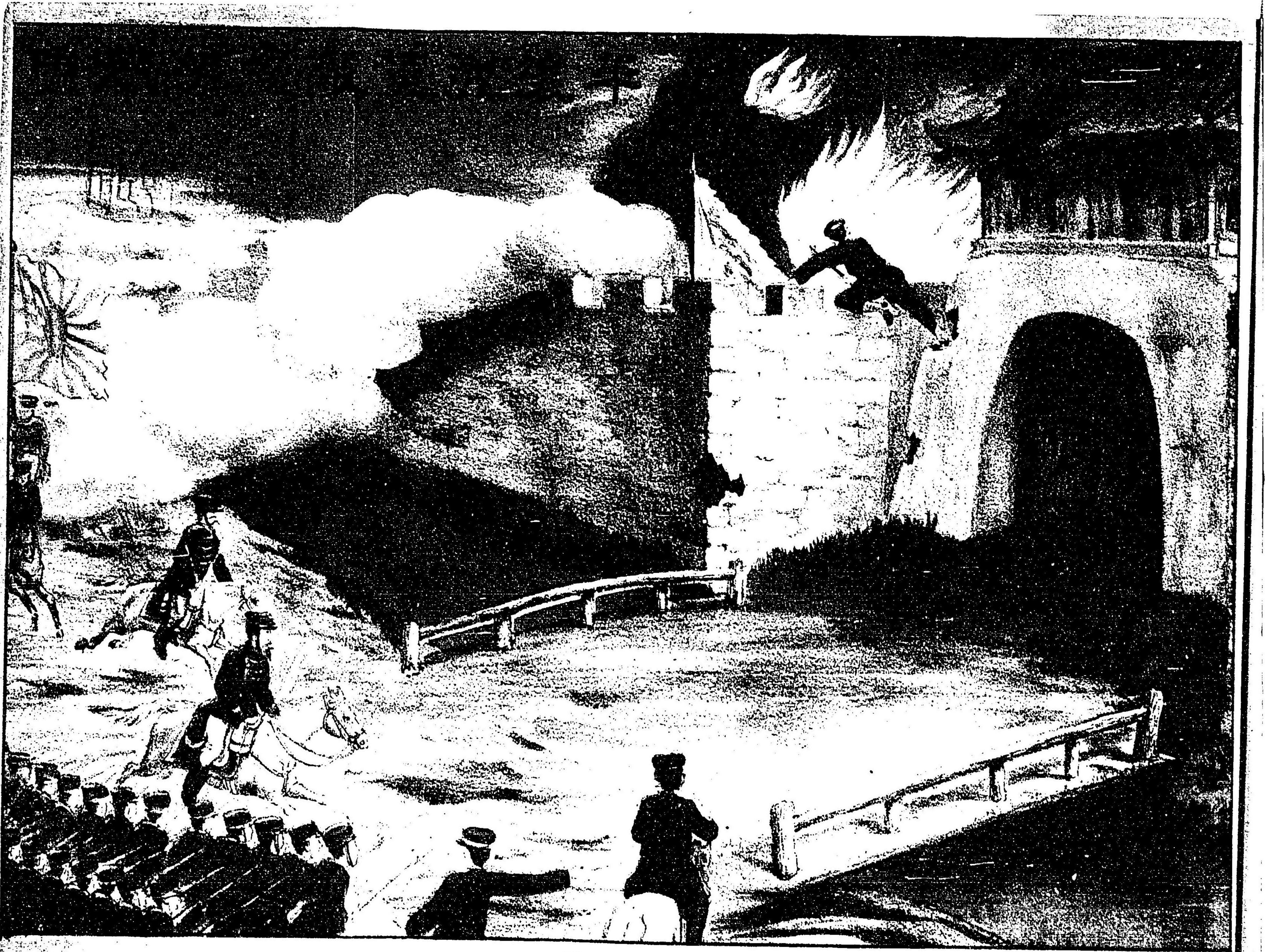
寒英 居士 / 編

M27

ACB-6094







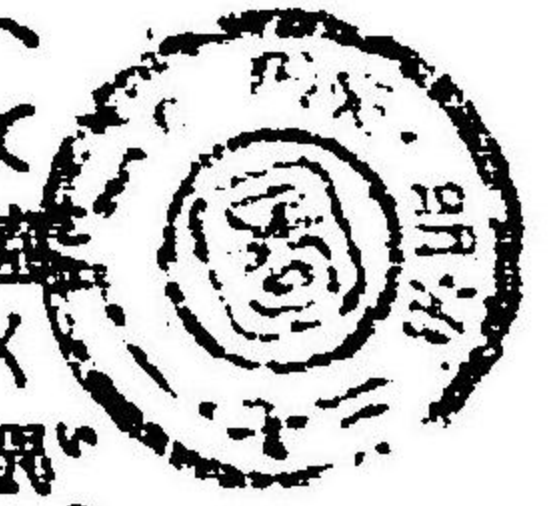
序

古人謂ふ兵は兇器也用ゆ可からずと然り然りと雖も捨て之を用ゑざれば大勢
靡して振はざるなり夫れ世に古今あり盛衰あり國に治乱あり興廢あり變亂は即ち
國の疾病なり凶器を動かすの已むを得ざるなり速に治療の策を盡すにあらざんば
蔓延遂に國家を傾むくるに至らん
今や隣邦朝鮮は奸臣賊吏權を専らにして宮闈に充ち加ふるに豺狼豔猾なる清國の
干渉日に月に甚しきを以て人民は苛政に困しみ訴馮悲泣すれども願み老怨恨の
纏結する處遂に席旗を東西に翻し竹籥を南北に横ふるに至る朝鮮之運命危哉
茲に於てか我日本は隣邦の義之を袖手傍觀するに忍す親しく韓國を啓誘して國政
改革を促す韓王之を用ひんとすれば奸臣是を遮り韓王之を納れんとすれば清國是
を沮む事物皆非なり交渉何ぞ完成するを得んや果極遂に干戈を用て日清の間に見



日清大戦争

寒英居士編



百萬の雄獅は幾層の波濤を越へて遠く異境に進撃し連戦連勝攻壘略取の快報頻りに傳へし來り四千万の兄弟姉妹をして拊舞歡呼せしめ而縛降服して北京城下は盟血盟約を爲さしむる正に近きにあらんとす泰西諸州は目するに東洋の一大強國を以てして曰く國土狹小なりと雖民心一致忠節義勇を勵み進取の氣象に富み兵士の訓練軍艦の操縦に至るまで世界の強火國と肩して毫も劣等に立つ事なしと捲舌恐懼して言是に及ばず呼應日華旗を東洋面に翻して益々萬國に赫照し稜威燦灼として帝國の威名煥然たる亦宜哉

抑も我國朝鮮と修好交通を開きしより既に貳千有余年なり上古神功皇
后征討以降朝貢を欠く事なかりしも時勢の變遷と共に或は叛き或は服
し表裏反覆計るべからざりしが茲に烈臣太閤鷄林入道を蹂躪せし以來

るに至る吁是實に勢の然らしむる處勢歟勢歟
友人天野寒英子夙に敵愾の氣あり躬現役軍籍になきを憐むも至誠の盡す處結で
「日本大戦争」を編するに至る稿成り來りて以て予に序を求む之を播閱するに文辭
平易にして卑からず密にして錯雜ならず予稿を指て暫し默然たり予詰て曰く何焉
が序せざる將た卑文粗稿毫も取る所なきかと予答て曰く否兄此亦志ありて此舉の
り之を讀むの忠君愛國の士も必ずや多からん此を思ひ彼を想へは碌々として寸功
なきの予漫に紙面を汚すを懼るればなりと予許さす即ち記して以て序に代ふ

甲午孟冬下澣

野口照月しるす

日清大戦

我を敵とし我を見る事仇讐の如くありき次に徳川幕府政權を掌握するに及び全く隣好を絶つるの姿とありけるが王政復古して明治維新の新天地を創建せしを以て再び舊好を修理すべきの旨を告知し且つ政權朝廷に歸して天皇萬機を總裁し玉へるの書を齎し使を遣して之を報せしに何ぞ圖らん彼れは我が懇情を悟らず猥りに無禮傲慢なる答辭を以てせしかば齟齬結せる征韓問題忽ちに沸騰して大に内閣に唱へられ廟堂の上終に二派に分裂し勅裁を仰ぐに至れり參議西郷陸盛副島樞臣江藤新平板垣退助後藤象次郎等皆附て曰く倭敵禮なきのみならず却て我を輕侮する斯くの如し如かず兵を起して征討せんには即ち其罪を督す一は以て帝國の武威を顯揚し一は以て戰亂の余燼を洩すに足らんと朝野の有志士海陸の將校贊同協力する者頗る多く廷議殆んど一決せんとす適々特命全權公使右大臣岩倉具視副使參議大久保利通木戸孝允等歐米各邦を巡覽し工商繁盛の狀富國強兵の態を觀察熟知し歸朝するに會す征韓論將さに上下を激勵し決斷切迫するを聞き大に驚き不可を陳じて曰く

日清大戦

創業未だ根柢を堅めざるに事を外國に拂ふ策の得る處にあらざる内地の治政を求め文武兩道を盛んにし軍馬備り食糧足りて後に是れに及ぶも亦遅からざるなりと主張勸かせ長くも御親裁を仰ぎ奉りて是に決す西郷以下心密に擇ばせ冠を掛けて退く是れを征韓論内閣破裂と稱す後ち清國文書を朝鮮に送りて曰く近頃日本台灣を征す是れ余勢を以て朝鮮に災するの意なりと欺罔詐誦の言を構ふ茲に於てか日韓の國際上一層の疎遠を來す淵源となれり八年九月我雲陽艦航行の途薪水の供給を得んとして朝鮮京城の河口江華城の沖に碇泊す韓人砲臺より是れを砲撃す警報一度東京に達するや征韓論再沸して交渉談判の極遂に修好條約を訂正す是れより多事瀕々絶ゆる事おし十五年七月京城の變亂起りて暴民公使館を襲ふ時の公使花房義質國を衝き辛ふして英國測量船の援けを得て長崎に着し事變を奏す外務卿井上馨長州馬關に出張し公使をして嚴談せしめ償金を出し謝罪使を發し修好條約の續條を締結し事變に已む然るに十七年に至りて積年隱伏せる獨立事大兩党の軋轉俄

日清大戦

然として爆發し血戦骨を懸すに至れり蓋し獨立党は日本の開明主義を
主唱し金玉均朴泳孝之れが巨魁たり事大党は清國の力を藉りて舊觀を
保維せんとす是れより先き條好規約に據り我政府は公使護衛の兵を
京城に派出す同時に清國も亦た軍隊駐屯の舉あり茲に於て兩陣相對峙
するが如く勢相下らむ會々典洞局開設の祝宴あり獨立党機に乘せて兵
を起し敵党の首領を殺し以て國是を定めんと欲し國王を奉じて日本公
使に托し兵を以て宮闕を防禦せしむ清兵之を聞き來り戰ふ反者内にあ
りて火は王宮に起り大妃は捕へらる我兵守を徹して公使館に還る敵兵
追撃し激闘數刻に及ぶ玉均泳孝等事の成らざるを見て日本に逃れ我兵
は難を仁川に避け急報を飛す我政府大使を發し和局を結び又清國大臣
と天津に會し談論數回事漸く治る是れを天津條約と云ふ廿六年防毅令
の爲め居留の國民非常の損害を蒙りしを以て大石辨理公使強硬主義を
以て談判し償金十萬圓の約を結ぶに至る斯くの如く規約の公文は既に
已に兩國間に取り換せ済みとありしに拘らず成れば破れ破れば成り其

日清大戦

他漁民の小紛擾殺戮事件等葛藤常ふ杜絶する事なく年として寧日を見
る事なきに又々乱麻の一争擾を來さんとて
頃ハ明治廿七年五月東學党蜂起して全羅道に蔓延し勢ひ頗る猖獗なり
遠近風を望んで是れに従ふ初め全羅道古阜の郡守趙秉甲頗る殘虐を極
め貪饜限りなへ臣民其下に立つ能わず怨骨髓に徹しければ徒党を囑
集し直ちに襲ふて城門を破れり趙秉甲之れを採知し既に遁竄せし後な
れば無念を忍び藩旗を翻し竹槍を横へ壯丁勇を鼓して進みけるが期せ
せして來會するもの益々多く到る處官衙を毀ち汚吏を誅し倉粟を開ひ
て窮民に賑給せり韓廷飛報に接し密に恐怖の念を擣くと雖擬勢を裝ふ
て曰く鼠賊何事か能く成さん天兵一度指せば立ろに亡滅せんのみと征
討の師を發するに及び誇稱の言未だ耳朶を去らざるに連戰連敗の報廷
臣を震慄せしむ洵や敵と兵器彈藥不銳利不精鍊なるにも拘らま官兵の
敗績慘狀を極むるは所謂兵士の氣力振と不振とに依りてのみ敵は烏合
の衆なりと雖鈍刀竹槍なりと雖一身已に犠牲の魁となり改命軍の眞先

日清大戦

に進み屍を曠野に曝露せん事を期するを以て死を願ふ健闘猛戦す之を
反して官兵は孱弱怯懦身命を抛つて戰場に出陣せしとは言へば影砲擊
に肝を冷し羞惡も廉耻も義心もなく遁逃以て一身を保たん事を希ふ斯
の如く危きに臨みて退歩せんとするの無氣力軍兵豈萬征討に向ふ
ども勝利を期せん事雪を摺ひよりも亦難事あり果せる哉敵兵勢熾にし
て官軍委靡振はず警電瀕繁にして使者項背相望む滿廷警愕周章し爲す
所を知らず而して清國全權公使袁世凱豫め之れを知り甘言を以て閔族
を誘ひ援兵を清國に乞はしむ清國特使の猾智を運らし直ちに其請を容
諾し三千の軍を送り牙山に上陸せしめたり蓋し清國の意たるや袁世凱
をして韓廷の權臣閔一族と深く結托し冥々裡々に於て朝鮮國を控制し
事大小となく干渉して以て陸然屬邦たらしめんとの手段に外あらざる
なり

此時に當り我日本國も亦將に居留國民保護の爲め出師せんとし天津
條約によりて清國に照會し軍旅を整へ出發せり軍隊は混成旅團組織に

日清大戦

て第九旅團長陸軍少將大島瀧昌混成旅團長となり六月十二日拂曉仁川
に安着し直ちに上陸しけるが一は仁川に駐り一は京城に入り配置助兵
迅速にし其宜しきを得たるには驚嘆せざるものなかりけり是れより先
き大島公使は東京に在りけるが急に出發して京城に赴き陸戰隊を帥ひ
て入京の途に上れり此報一たび韓廷に達するや勅諭盤へん方かく日本
兵の上京を拒絶せんとし使を大島公使に馳せて種々懇請せしも其意を
得る事能わす然るに清國公使袁世凱も亦我公使に向つて日本兵撤去の
請求をなせしが公使斷乎として背せず六月廿六日宮城に參内し朝鮮國
王に謁見して具さに出兵の理由を奏上し進んで「貴國は清國の屬邦た
る事を黙認するや否や」日を期して確答を得たし若し黙認するに於て
は万國に率先して貴國の獨立を承認せし我が日本は已むを得ず貴國に
對し斷然たる處置をなすべしと述べて退きしが期に及んで純固たる獨
立國たるの回答を得し故大に韓廷の諸臣に向て弊政改革の意見を具狀
せしが一度提議を容れしと雖陰裡に於て袁公使張りに驟を容れ内政に

日清大戦

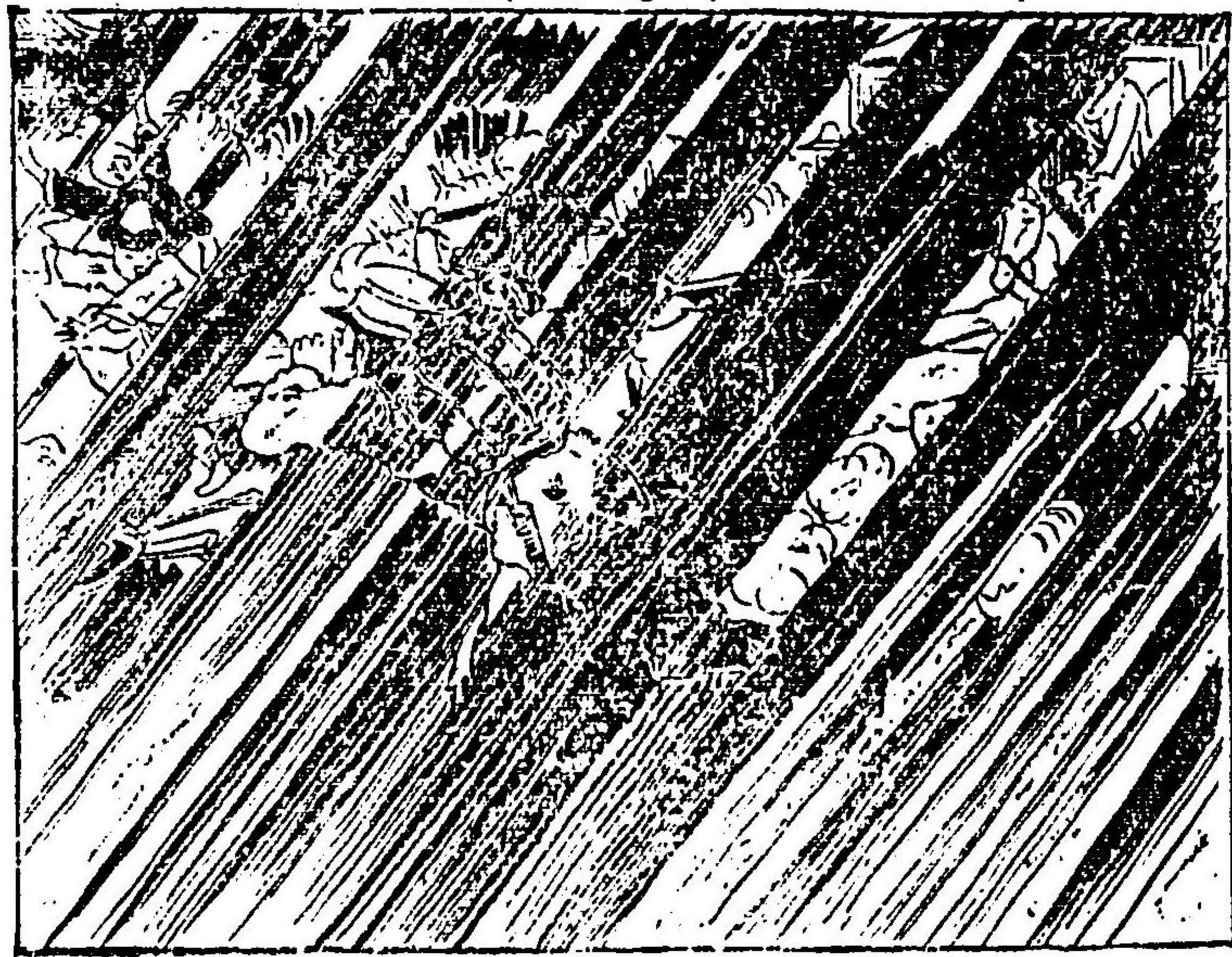
干與し曖昧模糊の間に韓廷の議を一變せしめ遂には日本兵の撤去を望み改革案を撤回あられたしと朝鮮政府より大鳥公使に申請せしを以て公使は朝鮮政府に對し二ヶ條の要求を申し三日間を限り決答を促し最後の談判を試みたりしが文辭極めて無禮なるのみならず我を侮りて懇情を仇とし以て拒絶に及びしかば結極公使の参内とありて京城の小戦鬪を呈出するに至れり

曩日上陸せし牙山の清兵は陣營を張りて毫も動かす彌々本國より兵士を徵發して武備頗る嚴なるが如しと雖食糧乏して近郷の韓民を掠り暴行極りあかりしが我兵は之れに反し規律嚴正にして部伍整肅毫も侵す所なし斯くの如く日清の大軍相持し一方に據りけるが戦雲漸く密に危機間髪を容れず龍山に駐在せし我軍隊は水原府に進行せり是に是て平韓山の風雲愈々急に愈々激へ局面は一變して干戈を動かし旗鼓相對するに至れり依て以下續々戦鬪の狀を掲げ如何に我軍隊の瀟灑勇なりしか如何に清兵の厝弱卑怯なりしかを讀者諸君と共に知らんとす

◎京城の戦鬪

大鳥全權公使が三日の時日を限りて嚴談せし要件に就ては朝鮮政府極めて非禮なる而も傲慢なる答辭を以て拒絶したり是に於てか公使大に憤怒し韓廷の官吏を相手と談判するも到底徒爾に属するを察し王宮に参内し親しく國王に奏問する處あらんと廿三日(七月)朝宮中に赴くの用意をなせり是より先き國王は時事の日に非なるを憂慮し使を大院君の許に遣はされ陰に其内意を傳へ

京城之對戰



しめられしに閔族は逸早くも是れを聞き附け大院君にして若し参内せ
んか途上に於て是れを要撃せんとの事大院君の聞知する處とありしか
ば大院君も少しく躊躇し召しに應せざりしを以て國王は已むを得ず大
院君入城の際日本兵を以て護衛せられん事を我が公使の許まで申越さ
れける是に於てか公使は其兵を以て大院君を護衛し二十三日午前八時
王宮に入らんとせしに突然韓兵の我兵に向つて發砲せしが抑も破裂の
根本にして夫より我兵は之れに應じ戦ふ事大凡二十分位なりしが韓兵
支へ難くして遁走敗衄せしかば大院君及び大島公使は無事入城し國王
に謁見したり然るに國王には我が大島公使從來の要求に對して厚く好
意を謝し毫も拒絶の意をかりしを示し直ちに大院君に政務を任せられ
しに大院君も其任命を拜受し當分は宮中に滞留し居る事に決せり此戦
や分捕せしは大砲十五門小銃千挺以上にして我兵死者二名負傷一名あ
り敵の死傷算なし

◎豊嶋沖の海戦 附豊島の地勢

廿七年七月廿五日午前七時朝鮮海豊島近傍に於て我軍艦に對し清國軍
艦より砲撃したるを以て我軍艦よりも之に應戦したる末敵艦操江號を
捕獲し清兵千五百人許り乗せたる運送船一艘撃沈めたり廣乙號は朝鮮
東岸に碇遠號は清國に向か遁れ去れりとは釜山特發にて其筋に到達せ
し警電なるが後に其の詳報に接するを以て前後對照せば又得知する所
あらん即ち是れを掲げんに七月二十五日午前七時支那軍艦操江號兵士
を載せたる運送船一艘を護衛し大沽より牙山に向を來る牙山港に碇泊
の支那艦濟遠廣乙二隻を是れを迎へんが爲め同港を出で航進す同時に
我軍艦吉野浪速秋津洲の三艦仁川に向ひ航行中ありしが恰も豊島の沖
シヨバイナル島邊にて其れに出會したり我軍艦の一には將旗を掲げ
たるに彼は相當の禮式を爲さざるのみならず戦闘の準備をなし我に向
て敵意を示す然れども海面狹隘あるが故に我三艦は方向を南面に轉じ
沖に出る須臾にして彼我の巨艦接近するに際し彼れ忽ち發砲を始めた

日清大戦

り因て我三艦は直に之に應じて砲戦す是に於て互に烈しく砲撃する事
凡そ一時廿分敵の北ぐるを追ひ砲撃せしに彼の一艦濟遠は直隸海灣に
向て逃走し廣乙は速力著く滅じ東海岸に近き淺瀬に逃走せり其間又忽
ち沖合より二艘の汽船來るに遺ふ次第に近き見れば清艦操江號にして
一は英商船旗を掲げたる支那兵船あり既にして吉野は濟遠を追ひ敵時
の後追及砲撃を行ひしも彼は淺海に走りしを以て之を追ふを不利とし
引返せり此間に秋津洲は既に操江を捕獲し該艦艦頭には我軍艦旗を懸
せり秋津洲艦長の信號に曰く敵艦降伏其艦長我艦に在り該艦は我兵員
之を運轉し其武器は相當の處置をなせり是より先き浪速は支那運兵船
に對し空砲一發投錨を令したるに我司令官より該船は本隊に連れ行へ
さの命を受けたり依て人見大尉を派し船内を取調べしむ該船には清兵
一千百余人警電一千五百人であるは誤あらんを乗り込ませ武器を積載
し支那政府に雇はれ牙山に航行中ありと告ぐ因て此船は本艦に續き來
るべきやの間に對し船長答て曰く吾人助かし只貴命の儘のみと依て直

日清大戦

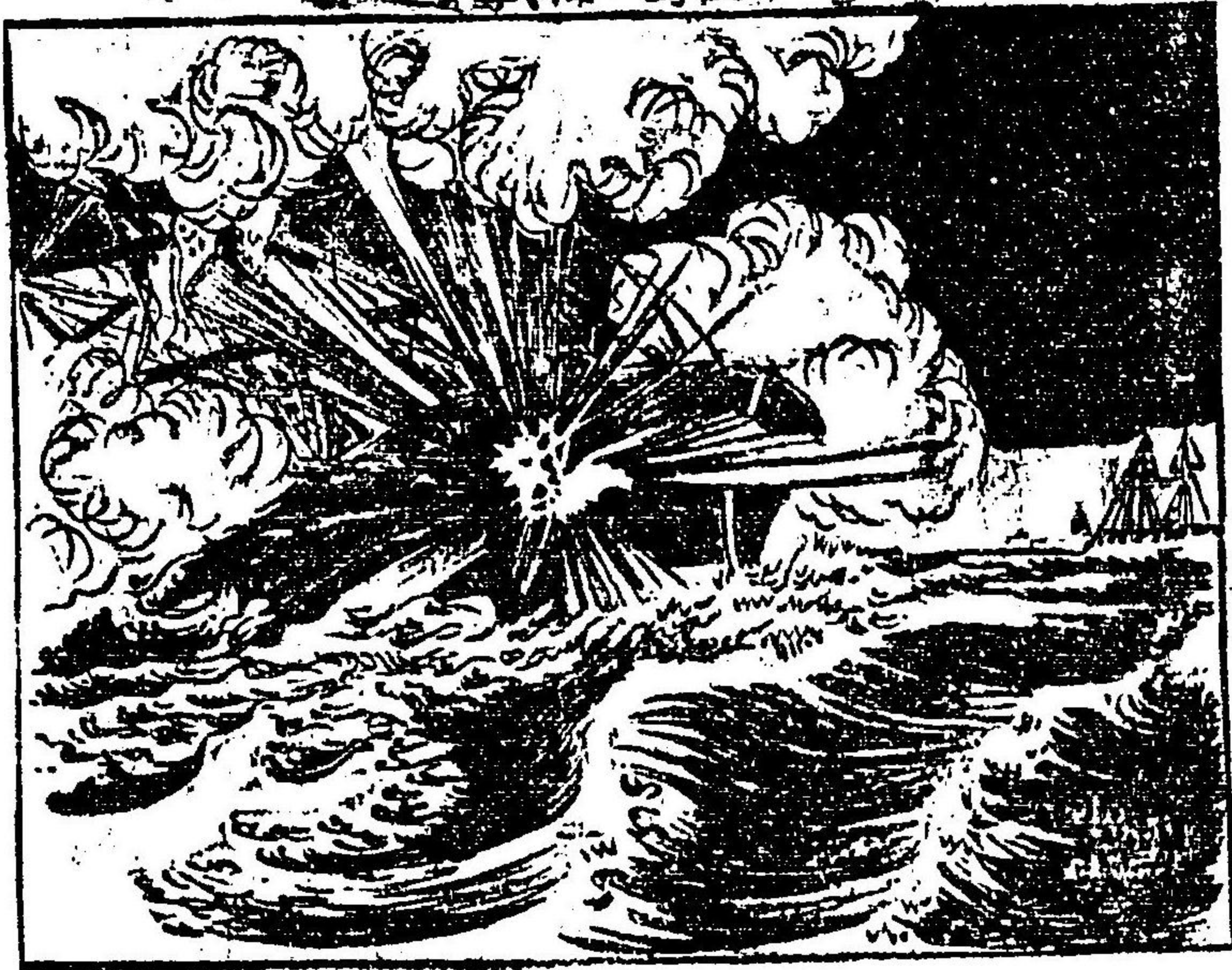
に投錨せよと令せしに願くは端艇を送られたしと乞ふ因て端艇を送り
派遣士官は船長に對談せしお船長曰支那兵は余の其艦に繼續するを許
さずして太沽に歸航すべきを主張すと此間船内騒然我に對して敵意を
示めす而して船長以下は頗は支那人の脅迫を受くるを知り浪速より信
號を以て其船を見捨よと命す彼より端艇を送れと信號す我より彼端艇
にて來るべしと信號す彼より吾々を許されせと答ふ故に清兵益々船長
を脅迫し我命を拒むものと認め前檣に赤旗を揚げ同時に信號を以て直
ちに其船を見捨よと命す是に到り愈々破壊の事に決し午後一時遂に沈
没せしめたり此時英人船長以下皆海中に飛入る支那人は之を見て船
長等を射撃したり我軍艦よりは又端艇を發して海中に飛入りし船長以
下運轉手操針手等を救助せり而して運兵船には支那陸軍將官二人大隊
長四人中隊長十人兵員千百人野戰砲十門を載せたりと云ふ嗚呼勇頭第
一の戦に於て我艦は一人の負傷者なく艦体又異狀なくして敵の二艦を
一大破壊に及び一艦を捕獲し兵員千百を魚腹に葬らしむるとは壯絶哉

快紀哉
戦地豊島の地勢は仁川と牙山との間なる小阜の南徹西凡七哩半の海上に在る一島にして清國芝罘旅順口等より牙山に至る航路に當り仁川濟物浦の備地を互る凡る二十六哩強にして近傍水深く岩礁少く軍艦の操縦に適したる所なり

◎清艦三隻

豊島海戦にて我艦体砲撃の下に捕獲せられし敵艦操江は北洋艦体に屬し木製の砲艦ありとす噸數七百馬力三百六十速力(不明)防禦甲板なく武器は大小砲四門を有し乗組員は九十一人あり此艦は清國昔にてはツアキアン(北部の音)と呼び常に白河口に碇泊し李爺最愛の軍艦なり近海の航行外資の渡來必ず之れに搭せ之れに招じて饗宴を張るなりと云へば海上第一戦に於て敢果なく我軍艦の爲めに分捕せられしを聞かば哀情果して如何に

我艦体の追撃に遇ひて幸くも逃亡せし濟遠艦は北洋艦体に屬し清國軍艦中最も上位を占むる巡洋艦なり噸數は二千三百馬力は六千二百速力は十八防禦甲板を有し武器は後裝八吋砲三門六吋砲二門機關砲十門二大小合十七魚形水雷四門を有し乗組員は二百二人なり
戦場を遁走せし廣乙艦は東に航して濱岸に近き淺瀬に乗揚げたる事は追撃なせし我軍艦秋津洲の認めて歸る虞なるが廿七日(七日)早朝に於て我軍艦



高千穂及摩耶より端艇を發し該艦を檢視せしもの報ずる處なりと云ふを聞くに廣乙はコロリン灣の西隣なる小灣内の淺瀬上に破船し居れり同艦は一等水雷砲艦速力十七海里にして十二瓏クルツァ式速射砲三門六斤速射砲四門及機關砲數門の外水雷發射管四を備へしが火藥庫破裂の爲め船体の多分は浸水し充分之を檢視するに由なし蓋し我軍艦の爲其要部を擊破せられて周章遁逃の結果終に淺瀬に乗揚げ保護の術なく乗員は自ら火藥庫に火して逃走せるものあるか或は要部を砲撃せられ爲めに取りたる火引て火藥庫を破裂せしめたるものなり乃ち其本部は多く焼失し又艦首より凡三分の二の處中折して半ば水に浸さる艦内上甲板は鋼骨を現はし其十二瓏砲は尙は實用に堪ゆるが如し右舷側砲の傍に死屍累々として艦橋の下に於ける司令塔内の如きは羅鐵盤信號旗等粉碎して慘狀を極め中に一の立屍ありしと蓋し艦長あらんか其他所々に屍わりて臭氣殊に甚しかりしと又下甲板に於ても數多の屍あるを知れども浸水の爲め詳察するを得ず我軍艦より發せる彈着は頗る精確

を証するに足るものありて其儘に水面上に出でたる部分のみに於ても大砲彈を受けたる跡十ヶ所に及び其他小口径速射砲等の破壊力又實に大なるを見る端艇は之に乗じて遁れたるを以て其三隻は陸岸に漂着し居るを認めたりと云ふ聞く海戦に於ては兵士の勇悍ある氣象を要するは勿論なりと雖軍艦の操縦即技術上の熟練不熟練にて勝敗を決する事過半を占むる者あるに清國にては唯に表面的軍艦の陳列にて實用に應ずる事能はずして斯くの如く脆くも一戦の下に敗艦を取りしは即技術士官其人を得ず艦長其人の如きも賄賂を以て上官に媚び以て要部の職に登ることを得たるもの多ければ今回の敗報亦怪しむに足らざるなり

◎成歎牙山の進撃

我陸軍は大勝利を以て成歎の支那兵を擊退し三十日(七月)午前七時より牙山に向ふ進むとは佐世保發の電報にして事實確報たる事明白なり是

より先き急報以て日清兩兵の陸戦を報じて曰く去月(七月)廿七日(牙山)附近に於て日清の兩兵大に戦ふ清兵三分の一は死傷し其餘は悉く遁亡我が大勝利と之を見るも成歡(成歡)牙山は既に我兵の勝算をなすもかく確實なり果せる哉七原に放ける大島少將の許より牙山本據占領して陸戦大勝利の詳報に接せり曰く二十九日朝三時開戦激戦五時間の後我軍全勝を得て悉く成歡驛の敵壘を抜きたり支那兵二千八百余人にして死傷五百余人我軍の死傷將校五下士卒約七十名敵は狼狽全く分散して洪州の方向に潰走せり蓋し群山附近より朝鮮船に乗る積りならんか分捕軍旗數旋大砲四門其他山の如し猶追撃して牙山の根據を奪へりと快報届し來る

◎盛字軍と牙山屯營の清兵

成歡役の戦に於て我軍の對手となり最も能く戦をたるとは盛字軍中の一部にして其他の清兵は我軍の銳鋒に當り難く合離一二時間にして既に我先きにと逃出したるにも拘らず盛字軍は能く之れを支えて遂に五時

間も防戦したりと而して成歡に前營を張り居りし清兵の數は二千八百人と聞へしも牙山の本營に屯在し居たる清兵の數に至ては更に判然せざりしが八月六日其筋に達したる報知に因れば牙山に上陸し居りし清兵の總數は五千五百人にして内二千八百人をして成歡に前營を張りしめしものなり因に配す成歡の地勢は轉地に在る清兵の本營とする牙山を距る事四里餘の東南に當る一少邑にして京城より進じ我軍隊を防戦するに最も要害の地にして清國軍は此地に砲壘胸壁を築き固守し居りしものにて清兵の爲めには死力を尽し守らざるべからざる地なり

◎我兵の凱旋式

成歡(成歡)牙山の敵兵を蜂撃せしめ根據を奪ひて勝利を博したる我軍は一先づ京城に凱旋せしが同地よりの電報に依れば旅團は昨(八月)五日國王の勅使公使以下居留人より盛んなる勸迎を受け歸營す同夜國王より將校一同立食を賜はると此日綠青の木葉を以て凱旋門を飾りしが銅雀津頭

を去る十五六丁の處にして是れを圍繞するに大小數十の旗を以てし我軍隊の凱旋門に入り來り最と嚴肅に整列するや大島公使與先に進み出で天皇陛下万歳と大聲以て三呼し各員唱和す大島旅團長亦た朝鮮國君主陛下萬歳と唱ふ各員之れに和す事前同じ次に勅使慰勞の辭大島旅團長の答辭あり聽て式全く終りて兵士は徐々會營に歸着す

◎成歡の役に於ける我兵士の死傷

成歡の戦ひ牙山の攻壘にて勇進激闘して死傷したる將校及び下士の氏名を掲げんに

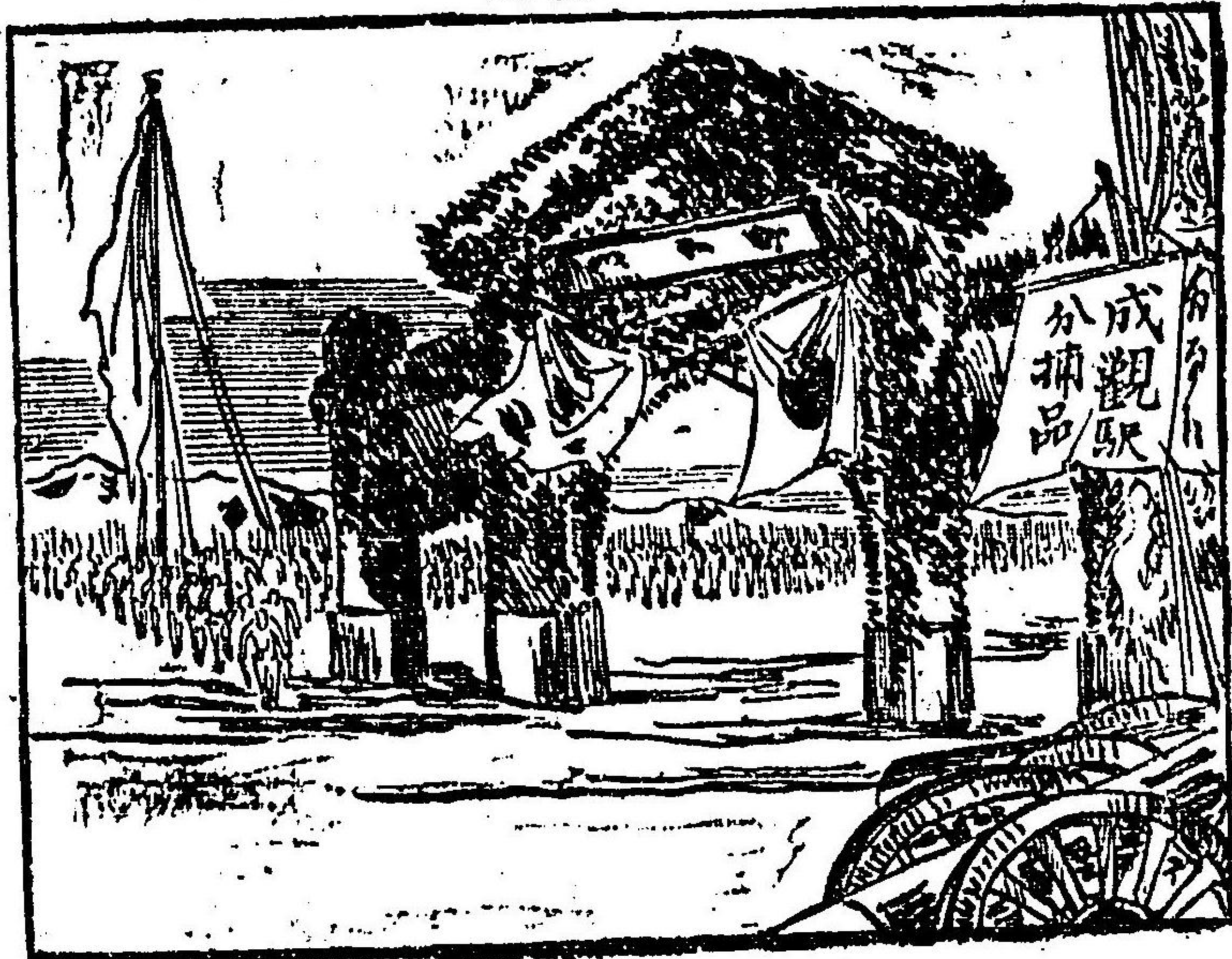
- | | | |
|--------|--------|------|
| 左足貫通銃創 | 陸軍歩兵少佐 | 橋本昌世 |
| 戦死 | 陸軍歩兵大尉 | 松崎直臣 |
| 戦闘中溺死 | 陸軍歩兵中尉 | 時山貞造 |
| 足部銃創 | 陸軍歩兵中尉 | 山口貞 |
| 銃丸頭部擦過 | 陸軍歩兵中尉 | 守田利貞 |

足部銃創
陸軍歩兵少尉 山田四郎
戦死及戦闘中溺死
陸軍下士卒 三十二人
負傷
同下士卒 五十人
但し入院後死亡せる者五名

◎成歡激戦余聞

大島旅團長は左翼本隊を率ゐて敵の幕營前面なる樹林中に在りしが敵の陣より放發したる野砲の彈丸飛ひ來りて纒か百メートルの地に落しが天運強く幸に破裂せざりしを以て無

京城凱旋



事安体にありしは獨り旅團長の幸福のみならず軍隊の爲め國家の爲め
一大幸福なりと云ふべし
我軍長驅して敵營を明瞭せんとす清兵第二堡壘より發砲瀕あり此時左
脇の叢林中にありしは即ち福島中佐長岡參謀等にてありけるか雨と降
り霰と飛び來る彈丸は危くも中佐の頭上を掠めて後背に落ちしと危哉
然れ難中佐の自苦從容として馬蹄高く兵を指揮して清兵を擊破せしは
流石無人の大膽を横断して碧眼人に一驚を與せしめたる勃々たる勇氣
眞に稱賛に堪へざるなり

◎橋本少佐の負傷と松崎大尉の戦死

成歎激戦中橋本少佐過つて流丸に觸れ脚部を負傷せり少佐は十一聯隊
第二大隊に長として左翼本隊に従つて敵地に進入し健闘せしに不幸に
も彈丸に貫かれたり少佐如何に瀕死なりしよ齡己に壯を過ぎ頭髪半白
の老将あり今此負傷に際し少も暇がす流血淋漓たるにも係らず奮戦し

て奮戦し叱咤號令少しも傷創を成せざるものゝ如し折しも衛生隊の軍
醫馳せ至りて是を見るや少佐の體を控へ糊劑を施し治療を加へ野戦病
院に送りたりと云ふ吁少佐の如き老いて益々壯なりといふべし軍人た
らんもの難も斯くあらまほしき事なり

我軍の成歎に向ふ夜は已に深更にして一輪の弦月暗澹として高く嶺頭
に懸り陰々たる冷風は異域山川の魑魅魔風を吹き送るにや面を拂ふて
一層凄然たる光景を呈せしならん然りと雖銳氣昂軒なる熱血を充たし
忠君愛國の精神に富る我大日本帝國陸軍々隊の軍人には却て陽氣惠風
の思ひあらしめ兵氣一段振興せり聽て安城渡を打ち渡り將さに敵壘を
衝かんとするや銃聲一發耳朵を震へり是れより日清兩軍の先途と戦ふ
事凡三十五分間時恰も午前二時四十分銃聲漸く己むと同時に吶喊の聲
は天柱地軸も破裂せんばかり敵壘終に陥れり此戦や先登第一の烈功を
立てしも遂に敵丸の爲めに安城渡頭の鬼と化し去りしは實に陸軍歩兵
大尉松崎直臣君なり而て大尉の死体を拾するに右肩より左脇に懸け小

銃弾の爲めに討ち貫ぬかれたる痕跡を認めたりと云ふ大尉奮闘の状想
ひ出せば幻の如く映出して追悼の情に堪へず今其略傳を掲げ讀者諸君
に報せん

◎松崎大尉の略傳

陸軍歩兵大尉正七位勳五等松崎直臣は舊熊本藩士あり安政元年一月生
る人なり爲り沈勇にして淵達時に漢學に通じ兼て文章を好くす一日慨然
として思へらく僻陬の地學ぶに良師なく交はるに良友なし空しく西遊
の士と化し終生一の爲す處もかく志望を達し功名を立つる能はざるは
男子の恥せる處なり聞く東京は名士學者其人に乏しからずと若かず郷
關を去つて東都に遊ばんにほど單身東京に出づ時に明治七年なり即ち
陸軍兵學寮に入り九年三月陸軍少尉試補に任せられ東京滞在を命せら
る十年西南の變起るや君は鹿兒島逆徒征討として出張を命せられ全年
四月陸軍少尉に任せらる君の任所にあるや各地に轉戦し梅風沐雨の難

を忍び屢々大勳を顯はす乱平
きて勳六等に叙せらる爾來職
務に勤勞して累進大尉に上り
前途頗る望を屬すべき有爲の
人なりしに惜哉四十一才を期
して壯烈なる芳名を万世に傳
へ身は九泉の客となれり砲銃
の聲劔戟の影は亦以て天上歌
舞の音樂に導るゝの思をなし
地下の功臣に見て實況を談笑
せるならん今君が在勳中の賞
典に預りしを掲げんに

一明治十年三月十六日軍勢
後慰撫として金五圓下賜



一 全年五月十八日前同断
一 同年十一月十八日鹿兒島縣暴徒平定の功を賞せられ酒課料を下賜せらる

一 同十二年四月十七日鹿兒島暴徒征討の功に依り勳六等に叙せらる
一 同十九年六月十八日勳五等に叙せらる

◎威海衛の砲撃

豊島沖の海戦にて日本海軍の手並に忍れてや我艦進撃威海衛を衝きしも彼の軍艦隻影も見へき八月十四日佐世保發電に曰く我艦隊は本月十日早朝威海衛に在る敵の艦隊と攻撃するの目的を以て同所に進航し砲臺を砲撃せしも港内に彼艦隊あらず依て砲撃を止め同日午前八時引揚げたり我艦隊無事ありと又威海衛附近の砲台にては我軍艦の來襲を知るや豊島海大敗の耻を雪ぐは此時なりとの模様見へ各砲台に据へ付けある二十四瓏の海岸砲數十門は一時に砲門を開ひて砲撃し其勢を甚だ

猛烈ありしも我艦は自由自在に進退操縦して一丸も命中したる物なく而して我より發したる彈丸にして砲台に命中したるもの甚だ多かりし由なれば彼れ砲台は非常の損傷を蒙りしならんと云ふ

◎敵艦の奔竄と一時間餘の砲戦

我海軍は敵の艦隊攻撃の目的を以て威海衛に進航し先づ我より戦を挑みしに當時碇泊中ありし敵艦二三隻は應戦せざりしのみならず我艦影を認むるや周章狼狽して渤海に逃れ去りたり故に我は大に力抜けたるも其内敵の砲台より挑戦したるに付我は直ちに之れに應戦し即午前七時より同八時頃まで砲戦殆んど一時間餘なりしも元來砲台攻撃の目的に非ざりしを以て一同無事一先づ引揚げたるなり

◎高陞號事件の判決並に其理由

七月廿五日韓國豊島附近海戦の際我艦の轟沈せしめたる清國運送船英

國海軍の高陞沈没事件に付英國東洋艦隊司令長官裁判長となり上海に於て審判中の處々判決ありたりと其電報に曰く昨日(八月十七日)海軍裁判所は高陞沈没事件を審せしが日本は爲め利益なりし英國海軍提督は該船の撃沈は正當なりと思考する旨報告し且つ何等の要求となさざる様政府に勸告せり而して其理由の大意なりと云ふを聞くに高陞は大英國々旗を掲げ居れば日本海軍は之れに向つて國際の手續きを爲し船長も此手續きに應じ適法の處置を爲さんとせしも乗組清兵は船長の命令に従はざるのみならず船長を脅迫し且つ船長を討撃したるは既に船長より高陞號を強奪したるものなり日本海軍が遂に最後の手段を執り同船を沈没せしめたるは全く清國の強奪後にあるを以て其處置を正當なりとす

◎俘虜に關する取調書

豊島成秋の海陸戦後我軍の俘虜となりたる支那兵三名に付き其際其

筋に於て取調べたるなりと云ふを聞くに曰く

捕虜 北塘練軍太營 歩兵 李裕發
同 歩兵 馮玉山

問汝等の姓名は何と稱するや 答李裕發馮玉山 問幾才なるや 答三十五才(李) 三十四才(馮) 問汝等の生國を述べよ 答直隸省河間府故城縣(李)同交河縣(馮) 問汝等の所屬隊號は如何 答兩名とも北塘練軍左營なり 問汝等の職掌は如何 答兩名とも洋鎗隊の歩兵なり 問何日より何地より何船に乗り出發せしや 答六月二十一日(陰曆午前三時)太沽より高陞號に乘組み當國に向け出發せり 問太沽出帆以來沈没までの状況を述べよ 答出帆後砲撃を受くる前まで始終船底に在りし故途中の事は一切知らず六月廿二日晚(牙山灣)まで來航せしに日本軍艦に逢ふて直ちに進行を差し止められ該軍艦より士官等來船せしが是等の日本船に歸着するに聞も亦く砲撃を始め瞬時にして撃沈せしめられたり高陞號には羅鎮台吳鎮台二將北塘の兵二營凡千百人(内砲隊百人)を率ひ乘

組み居りしが日本軍艦より士官來り高陞號船長は降服せんとする時羅は憤激して戦死せん事を部下に命せり自分等も此時に至り始めて甲板に呼上られ銃を放ちたれども間もなく船は沈没し羅吳二鎮台は船長始め外國人と共に沈没せり自分等は幸ふして一島に漂着したるに六月廿四日に至り小船に乗り來れる日本人の爲め救命せられたり當日生残りて陸地へ上りたるは自分等外五六十名もあらんかと思はる 問此度汝等と前後して派遣せられし兵は凡そ幾何なりやと思ふや 答北塘其他都合八營なりと聞けり天津より蔣統領と云ふ人二千余人を引率し六月十九日太沽より乗船し旅順口に向ひたる事を聞けり此軍隊は旅順口より陸路京城に進發するよし其外何とぞも知らず又太沽乗船當時より他の軍艦運送船とも一隻も見受けず勿論船艙内に墊伏し居たること故外面の事は一切知るを得ざりし

捕虜 古北口練軍右營喇叭手 陳 永 海
問汝の姓名は何と稱するや 答陳永海 問幾才なるや 答二十一才

問汝の生國は何處なるや 答清國直隸省定保府古北口 問汝の所屬隊號は如何 答古北口練軍右營 問汝の職掌は如何 答號令喇叭手 問戦争のときは何れに在りしや 答成歡驛の東方ある武毅軍前營の打出たる跡に詰め居れり 問汝の本營は如何せしや 答若干人を殘置き他は皆前記の營内に詰め居たり 問敗軍の後汝は何處に置れ居りしや 答成歡驛の民家に置れ居たり 問何月何日何處にて捕れたる哉 答六月廿九日我七月卅一日成歡驛に於て捕はれたり

◎山縣大將

日本軍司令長官山縣大將には同司令部參謀長小川少將及中村一等監督其他立花青木須知の諸氏を率ひ九月四日午前二時五分新橋を出發して廣島に至り同日宇品港を搭船して渡韓の途に上れり猛勇の大將今や去つて韓山に向ふ兵氣の振威夫れ思ふべし

◎平壤の地勢と敵壘

平壤は天下要害の險地にして前面大同江を擁し守るに易く攻むるに難し京城を距る畢五十五里義州に至るまで五十里余なり通路は北京の行路に當れば朝鮮八道中第一等に位し車馬の往復最も便なるも降雨の時は泥濘甚しく車輪を没し行路甚だ困難あり而て今や清兵險阻をたのんて是に據り壘を高し壕を深ふし守備怠る事なく持久の策を畜し大同江を渡りて來攻の形勢少しもかく此地に據りて日兵を支ぬ國境を堅めて迎撃せんものゝ如し清廷亦頻りに兵を派遣し如何にもして我軍を擊破し軍氣を挫き呉れんものと堅守の策を畜す然かりと雖屯在せる歩騎の清兵は毅字軍あり盛字軍あり又仁字軍ありて雜取極まれり殊に騎兵の如きは最も不規律ある滿州兵なるが故ふ兵士は自己の闘する將校の如何なる人あるか又其面貌をも知らざるもの多しと云ふ

◎平壤附近の遠想戰談

世人は昔指を屈して我兵の京城を出發した(此間廿四字掲載)れば最早や此頃は一重大血戦を見るならんと思惟し韓山を望んで飛報を待ちつゝあれども是は至て素人の考へなり始め我軍の牙山を衝くや其以前に敵の兵勢近傍の地勢等は概ね探知し特に北進して清國の本土を衝くにこそ南顧の憂を拂ふの必要もありたれば猶豫せずして突進直に敵壘に迫りたるも平壤方面の戦争は之れと同視すべからず平壤に到着したる敵の兵數其助靜等は我の斥候之を報する事を得るも平壤は義州に通じて清國本土に連絡し敵は續々兵を送の便利もあれば此邊も略ぼ豫知せざるを得ず又平壤に進むるに在ては唯平壤屯在の清兵を拂ふのみに止まらず其儘前進して清境に臨むの用意もなさいるを得ず要するに平壤方面の戦争は牙山の戦争よりも規模大にして日清兩國興廢の分るゝ大戦争なれば容易に坐上空論の如き譯に行かず特に開城より平壤に進む間は道路險惡にして線路收まらず往々野徑を行く所もありて隊伍整々我軍を進むるに困難あり斯る險惡なる數十里の道程を(此間八字掲載)我軍

日清大戦

を進むるの困難は又察せざるべからず而して我先登が平壤近傍に達したりとて直ちに戦端を開く杯と思ふは昔しの清正時代はいさ知らず今日の戦略にては決して斯るをなすものはあらず必ず大戦争をなすには像め兵を要所々々に配置して鳥に兩翼あるが如く人手足備はるが如くして始めて戦端を開くに至る左れば此度我兵が平壤方面に進みたる以後既に十七八日にありたるも未だ砲煙の塵らざるを見て

我兵ノ勇戰



怪しむものあれども以上の道運あれば決して怪しむに足らぬ云々と某將軍の談柄なりとて毎日新聞に掲ぐる所なれども流石は將軍の二字を擔ふ某既さ得て妙ありと思考するを以て轉載して讀者の清覽に供す

◎御親征

明治廿七年九月十三日長くも我大元帥陛下には大本營を廣島縣廣島市に移し風箏を進め玉ひて躬親ら御征清遊され王師を都督し玉ふ渡韓の將校下卒に至るまで感激以て忠精の道を勵み討尽せん事其れ近日にあらん御發轍御旗様を記し奉らん

大元帥陛下には午前七時といふに皇后陛下御同列にて正門出御あらせ給ふ陛下には大元帥の御略服を召させられ徳大寺侍從長御陪乗を賜り次に土方宮内大臣香川皇后宮太次で池田侍醫齋藤内大臣秘書官次に皇后陛下には白茶に菊桐を織り出したる御洋装を召させられ室助典侍御陪乗し次で女官數名供奉し次に有栖川參謀總長宮殿下を始め岡澤

寺内兩少將野田陸軍經理局長以下大本營附の各將校次に小松近衛師團長宮殿下を始め奥川村兩少將並に飯島參謀長各參謀副官等騎馬にて供奉し肅々として御願路を同十五分新橋停車場へ御着せらる。此時御先若の皇太子殿下を始め奉り熾仁親王妃威仁親王同妃彰仁親王妃依仁親王妃載仁親王妃の各殿下伊藤總理大臣以下各大臣樞密宮中兩顧問官各國公使其他文武の百官何も停車場の内外に整列奉迎せり。兩陛下には徳大寺侍從長の御先導にて橋上便殿に御小憩此間奉送の親王並に妃殿下高等官へ謁を賜ひ夫れより去らに侍從長御先導各親王殿下を始め奉送の諸官風従し別仕立の瀛車に乗御同廿五分天顏殊に麗しく御發せらる。御發せらるる處庶民群集せざるなく奉送の者奉迎の者通御あらせらるれば万歳万々歳の聲天に轟き地に響き父老幼童に至るまで皇運長久皇軍戰勝を祈らざるなく偏に御親征の勞と感謝し奉らぬものなかりけり。因に配す皇后陛下には新橋停車場まで御奉送相濟み午前七時四十分

宮城へ還御あらせられ東宮殿下にも同八時還御あらせられ給ひぬ。皇太后陛下には萬里小路典侍に奉送御名代として新橋停車場へ差遣はされたりと承り及びぬ。行在所は廣島市流町なる淺野侯爵所有の泉邸に決し大本營は第五師團司令部と決し司令部は僧行社内へ移され只法官部のみは廣島憲兵隊へ合併せられたり又廣島大隊區司令部は第九團司令部へ移し近衛兵營には歩兵第九旅團歩兵第十一聯隊を以て之れに充て野戰砲兵第五聯隊は近衛砲兵營に充てられたり。

◎平壤の大激戦

廿七年九月十日清兵の先鋒は黃州の守を棄て、平壤に潰走す。我陸軍は江東及黃州の二道より平壤を攻撃し、數時間の後清兵潰散捕虜數十名死傷算なしと、釜山發電にて傳ふる處なるが、電文簡短にして詳細を知るに由なしと雖、我陸軍は愈々猛進北行大攻撃を試み、つゝあるや明なり斯

日清大戦

くの如く喧傳瀕りあれども未だ確報を得ざるを以て日夜鶴首して事實明瞭の快報に接せん事を希望し至りしに十四日に至り始めて是れを確むる事を得たり曰く我軍の先鋒は既に中和三登成川の各地に達し清軍の前營と衝突し戦闘を始めたり又た黄州の一方より進みたる一隊は去る十一日鐵島の上流より大同江を渡り北岸に沿ひ沿岸の砲臺を撃破しつゝ平壤に向て進軍し元山方面の兵と東西相應じて進軍を試



日清大戦

ひと我軍の大進撃を試つゝあるや既に明々白々たり而して中和は鳳山平壤間の一驛にして義州路に當り三登は元山方面より陽徳を経て平壤に出づる中間に在る一驛あり又成川は三登より北の方十里余の處に在り共に元山方面の通路中樞要の處なり黄州に向ひたる我が一軍隊は十一日鎮島の上流を渡江し十二日全隊悉く渡江し終り直ちに平壤方向を指して進軍せり而して此一隊には野津中將も加はり居り同隊の殿をなし居れるなり鎮島の上流より平壤に至るまでの里程僅に二十哩に過ぎざれば平壤攻撃砲煙天を焦し砲丸雨と降らし平壤の陥落勇しき兵士の勳功近きに報じ來らん然りと雖世人勵もすれば僅々數時間にして陥落せし杯傳ふれども平壤は讀者諸君の知る如く古來有名なる要害の地なれば短時間にして拔くべくもあらざらん我軍隊の武勇なる大勝利の快報近きにあらんと思ひしに果せる哉我軍が十五日を以て平壤總攻撃に取掛り激戦の後ち愉快にも平壤を陥取せり此の快電戰地に於ける野津中將より十六日午前八時發電せり電文

平壤大激戰我軍全捷

武門寺



に曰く昨日(十五日)師團は平壤を圍み激戦の後大勝利今朝(十六日)未明
 全く平壤を略守す敵死傷極めて多し我軍將校以下死傷三百名なり委細
 跡よりと嗚呼壯快なり哉絶快なる哉此一大捷利よ斯る目出度き勝戦を
 耳にし歡天喜地國民の祝意を表して萬歳を唱ふるの際又々全日野津中
 將よりの勝報に接せり之れを聞くに我師團は糧食運輸の大困難に拘ら
 ず各道より平壤に向け前進し昨日を以て均しく城の四方を圍み激烈な
 る戦闘の後大勝利を得今朝未明を以て全く是れを略取せり敵の大將左
 實貴以下死傷生擒其他兵器米穀の我手に落ちしもの極めて多敵なり敵
 の兵力は二萬と稱せしが昨日來一二群を爲して我が哨兵線を逃れ去り
 しのみにて他は概ね死傷か及び擒となれり我軍死傷將校以下大約三百
 名此大勝利は得しは我
天皇陛下の威稜と將校以下の忠勤にあらずんば茲
 に至らず

但敵の大將左實貴は奉天府及牛莊附近に屯在せし奉軍の統領なり

十六日午前九時柴田第一野戦病院長の發電に曰く昨日平壤攻撃の際奉
 院せし負傷者將校十一名下士以下二百六十名即死少し入院後死亡せし
 者二名なりと又廣島發の急電(十七日)午前二時十五分發に曰く平壤激戦
 の時敵兵はマッサン附近に放火し火煙天に脹る統領左實貴以下俘虜無
 數兵器彈藥糧食悉く分捕其他の敵兵我哨兵線を侵して逃亡したりと實
 に平壤は北方の要地清軍據つて以て堅守し死力を盡して戦備せしなる
 も今や斯く容易に我軍の略取する處とある北京城頭旭日軍旗翻り武威
 を世界に輝さん事瞬時を出でざらん然りと雖攻撃の我兵士は如何に出
 勇の精神を勵まし死苦戰して平壤を陥落せしか頁を重ねて幸に是れ
 を知れ

◎陥落の詳報

平壤陥落の際我が壯勇なる將校以下士卒に至るまで如何に苦心して敵
 を掃蕩せしか今其詳報を記載せんに佐藤大佐の元山枝隊歩兵第十八聯

隊騎兵一小隊砲兵一大隊工兵一大隊一中隊欠く衛隊は成川より立見少將の勅令に依り歩兵第十二聯隊の一大隊第廿一聯隊の一大隊騎兵一分隊は麥田店より大島少將の混成旅團の歩兵第十一聯隊一大隊欠く歩兵第廿一聯隊一大隊欠く騎兵一中隊砲兵一大隊工兵一中隊衛隊半部野戰病院一個はコウウ(黄州)ならん街道より本部は歩兵第十二聯隊一大隊欠く歩兵第廿一聯隊歩兵第廿二聯隊ならん(一大隊欠く)騎兵一中隊砲兵三中队工兵一中隊衛隊半部は大同江を渡り右岸に沿ひ共に平壤に向ひ十五日四面より同府を包圍攻撃す大島少將の報に依りて敵の大部分は平壤府内と其左右のみ此隊は幕營し(平壤府内と其左右は幕營せるの意ならん)其小部分は左岸船橋里大同江には架橋を爲したり攻撃の結果によれば敵の砲は二十門以内に過ぎず然れども土人の言によれば敵は凡四万人なりと云ふ我本隊は渡河の爲め少しく後れ十五日の攻撃に於て敵の馬兵百余人を斃したり然れども此日の攻撃の結果は充分ならず依て十六日拂曉より再び攻撃を始めしが大島旅團は其將校即死六負傷

十二三下士以下死傷三百以上に及びたると彈藥の欠乏とにより已むを得ず攻撃を中止せしむる各面の戦況漸次有利の戦況を呈し午前八時頃遂に全く平壤を略取し敵の大將左寶貴以下死傷生擒其他兵糧糧食我手に落ちしもの極めて多敷なりと高陽郡山縣大將の許より九月十八日發電せしものなり此戦や頗る困難にして敵は準備に準備を重ね殊に大兵を以て守りたるも陛下の威稜を感き軍略の宜しきを得兵士の勇武あるを以て陥落の良結果を來し吾人同胞をして大白を擧げ万歳を唱へしむるに至りしは壯快又絶快

◎平壤戦團の後報と分捕品

我軍平壤の大攻撃を試み空前の大勝を博したるが其後報如何にと翹足して待ちに待たる處今茲に第五師團長の報告に係るものあり即ち其れを記せんに十五日午前十時前後敵騎兵大凡そ三營一營大約二百五十人我本隊の開展せる江西及甌山街道間に突進し來りしが其過半数は

我射撃に倒れ打漏されし者共は五人十人群を爲し江西瓶山の方面に散れし又十時頃敵の砲兵二百人許濬かに城の濠より河に添ひ沼の中を下り實山を越で江西に走り或は中和黄州に逃げたり其餘蕪州門近傍にて騒ぐ火炎の揚るを見しが九時頃より敵の歩兵陸續我哨兵線に突進し多くは撃退せられ一小部分のみ山間を越えて逃れたり元山枝隊の方面に於て同様の事あり四個の諸隊(重に元山枝隊)と我本隊の左側

野津中將平壤落見ル



術との間に獨立騎兵を置き連絡を取りしが敵の敗兵の多くは此方面より逃れ去りたりされども別に隊伍を爲すにわらず其武器を携帶し衣服を着けしものは甚だ稀なり余第五師團長は豫て元山枝隊に命じ順安に一部隊を止置さしが右の敗兵は此部隊に衝突し騒しく射殺せられて散亂せり要するに敵の退却方向は義州ある事は判然したりしにより枝隊を派遣し追撃せしめたり

軍旗兵器彈藥等の分捕は實に豊しく山をや嶺かん許りなるが其中に付金銀塊を捕たしたる目方三十五貫餘の箱四十個韓錢六万七千貫ありし此價格概算は金塊六十三万圓余銀塊十九万圓余韓錢十三万圓余合計九十五万五千五百二十圓余なり而して此の外米二千七百十石春粟八十石雜穀六百石余ありしと云ふ

◎勅語を賜ふ

平壤の戦勝に付き 大元帥陛下より左の勅語を下し賜はりたり

朕本營ヲ進ムルノ初メニ當リ我軍大ニ平壤ニ勝ツノ報ニ接シ深ク將校下士卒ノ勤勞ヲ察シ速ニ特偉ノ功績ヲ奏セシヲ嘉ニス

此勅詔を下賜せらるるや有柳川參謀總長官殿下は直ちに電報を以て之を在朝鮮第一軍司令官聯合總隊司令長官及び第五師團長に傳達せられたり

◎軍隊一同感泣す

平壤戰勝に付き大元帥陛下より下し賜はりし優渥なる勅詔に對し軍中將校は皆電報を以て奏上す
臣道實情は其在に堪へざるを懼る幸ひに平壤を拔きたるは全く

陛下御威徳の致す所なり今や優渥の詔勅を辱ふす將校下士卒皆感泣して益々奮進一死以て聖恩に酬ひ奉らん事を誓へり謹んで奏す

平壤 臣野津道貫

◎平壤清兵の實數と我軍の死傷者

平壤に駐屯し居たる清兵の實數に就ては風説區々なりしが確報なりと云ふを聞くに總勢一万六千人内盛字軍八千人奉軍三千五百人奉天練軍盛字衛千五百人毅字軍二千牙山の敗兵一千余人なりと野津中將の報知なり又我將校以下下士卒の死傷に付き各隊の細別とし是れを掲げんに
正面より進みたる大島少將の混成旅團にては

戰死

將校 六名
下士卒 百十名

日清大戦

負傷

將校 十八名
下士卒 二百五十七名

不明

下士卒 十三名

又た駒澤より進みたる立見少將の杖隊にては

戦死

下士卒 九名

負傷

將校 三名
下士卒 四十五名

不明

下士卒 一名

又た元山口より進みたる佐藤大佐の杖隊にては

戦死

將校 二名
下士卒 三十一名

日清大戦

負傷

將校 五名
下士卒 八十七名

不明

下士卒 十九名

又た野津師團長本隊にては

戦死

下士卒 四名

負傷

將校 一名
下士卒 二十一名

として各隊を通算する時は死傷者の總計は左の如くある也

戦死

將校 八名
下士卒 百五十四名

負傷

將校 二十七名
下士卒 四百十名

不明

下士卒 三十三名

◎海洋島附近の大海戦

豊島に敗れ牙山に潰へ日軍の向ふ處破竹の勢を當かべからず清兵は恰も霜露の旭日に照されし如く皇旗を望んで走らざるを以て茲に平壤の大捷を耳にし歡呼の聲東洋面に唱和せらるに際し又々一大絶快の海戦報に接するに至る即ち海洋島附近にて我艦隊の清國艦隊に出會して激烈なる戦闘の後一大捷利を得したる是れあり島村海軍大尉報じ來りて曰く本月九月十七日午後一時より同五時まで盛京太孤山沖に於て我軍艦十一艦と清國軍艦十四艦と水雷艇六艘との間に於て激烈なる海戦あり清艦揚威超勇來遠靖遠は撃沈せられ定遠經遠平遠は焼かれ残余の清艦は盡く大破損を受け西方に向け逃げ去りたり我方にては松島比叡赤城は多少の損害あり將校以下死傷ありと又伊東聯合艦隊司令長官よりの電報に據れば白く陸軍を護送し十二日(九月)仁川港沖に達し十四日第二遊撃軍と八重山とは仁川港に留め其他の諸艦を率ひて發し十五日大同港を發し第三遊撃軍と水雷艇碧城天城を嶺島迄進めて陸軍の應援をな

さしめ十六日日本隊を第一遊撃軍赤城西京九都合十二艘を率ひて大同港を發し十七日朝海洋島を経て盛京省大孤山港沖に至りしに敵艦隊十四艘と水雷艇六艘とに出逢ひ午後零時四十五分より午後五時過まで數回激戦をふし終に來遠揚威超勇の三隻靖遠又は致遠の内一隻都合四隻を破壊沈没せしめ其他にも大損害を與へたるもの多し現に定遠經遠の如きも火災起り頗る混雜の態あるを見たり其内日没に近づき敵艦隊は威海術の方向に逃げ去るの状ありたるが故に我艦隊も是れを過ぎる爲め凡そ之れを並行の行路を取りて進みしも夜中敵の水雷艇に備ふる爲め餘程の巨艦を離れて進みしが故に敵の所在を見失へり然れども翌朝天明に至らば必ず是れを見出し得るならんと期して廟島の方角に進みしに天明に至るも敵の一隻をも見出さず故に敵は威は元の地に引き返したるやも計られずと思考し昨日の戦死に引き返したるに遙かに二三隻の煙りを認めしも何れにか逃げ去りて其所在を失ひたり依て前日火災の爲め淺瀬に乗り上げ見捨てありし揚威を破壊し一と先づ當地に歸りた

り西京丸は軍令部長乗組員々
 危険に陥りしも幸に無事にて
 本部より先に當地に歸りたり
 此役我艦隊には沈没せしもの
 かく但し多少の損害を受けた
 るは勿論なり其内松島最も甚
 しきも職務には少しも故障を
 し我艦死傷者は戦死者將校十
 名下士卒六十九名負傷者艦隊
 を通じて將校下士卒合せて凡
 り百六十名内松島赤城比叡最
 も多し此役比叡赤城最も苦戦
 因に記す西京丸は開戦中敵

海軍中將 樺山 氏 進



弾を受け船機を破損せられしを以て
 進退自由ならざる爲め敵の艦隊及水雷艇の中を乗放くる際彼より水
 雷を發射したれども其効を奏せざりしと

◎勅語を賜ふ

我が海軍は黄海に大捷を奏し以て敵艦を轟沈して威を海上に震ひしを
 以て連合艦隊司令長官へ左の勅語を下し賜へり

朕我連合艦隊ノ黄海ニ奮戦シ大勝ヲ得タ
 ルヲ聞キ其威力既ニ敵海ヲ制壓スルヲ覺
 ヲ深ク我將校下士卒ノ勤勞ヲ察シ茲ニ特
 殊ノ勳ヲ奏スルヲ嘉ニス

◎奉答

黄海戦勝に付き 大元帥陛下より下し賜はりし優渥なる勅語に對し奉り伊東中將は左の如く謹で奉答したり

臣祐幸今や大任を辱ふし常に其職に堪へざる事を懼る黄海の役我艦体の幸に敵を撃破するを得たるは偏に陛下の御威徳と下は我忠愛ある將校兵曹以下専心奉命の致す所なり今此優渥なる勅語を辱ふす實に一世の光榮なり各艦將校兵曹以下一同感泣一死以て洪大なる聖恩に酬ひ奉らん事を誓へり

◎海洋嶋激戦の詳報

松崎海軍少尉は伊東聯合艦隊司令長官の使として九月廿四日廣島に來りたるに陛下より御召ありて親しく戦況を奏上し奉りしと云ふ今東京日々新聞は少尉が語したりと云ふ戦況の要を得たりしとて急報せる處あり茲に記するは即ち是れを轉載せしものなり讀者宜ろく前後對照し

て益々詳細を知れ

初め清艦十四隻は其水雷艇六隻と共に太孤山港に撃泊し居たるを我軍艦偵察中に發見し清艦は直に列を正して進み來り我艦と四千メートルの巨艦に於て發砲したり我艦は遠距離のため命中を誤らんとを危み三千メートルの巨艦まで進み始めて應砲す交戦四五時我艦は終始隊形を變せず清艦は遂に崩れ立ち來遠先づ沈没して後部より水に入り前部は昂立して半空に向へり致遠超勇續で沈没し士卒多く帆網に纏り號泣活を求む其状態慘あり我艦の敵艦を撃沈する皆砲彈を用ゐ水雷に依らざりしも能く二重底の來遠を撃沈したり是れチルソン以來稀有の奇巧あるべし比敵速力少しく遺憾を免れず且つ列の最後に在りしを以て敵彈を受け遂に火災の爲めに列外に出でたり西京は船板を壞られ列外に出でんとして猛烈鐵道定遠二艦の間を突過す其巨艦に七八十メートルにして清艦は之を衝突を求むると誤認したるや意外にも展開して西京を避け西京の爲に路を啓きたり同時に清艦は魚形水雷二個を放ちたる

も巨離近きに過ぎて西京の艦底深く水中を過ぎ抜き西京爲に事あきを
 得たり列外に出でたる比叙は一旦根據地に来り死傷者を運送船に移し
 醫官をも載せず直に引返して戦場地向たるも最早間に合はざりしは
 乗組の士卒が無限の遺憾とする所なりし松島は旗艦として前頭に立て
 るを以て砲彈を受くる最も多く爲に損傷を生じ列外に出でざるべから
 ざるを以て伊東司令長官及び聯合艦隊幕僚は橋立に轉乘し之を旗艦と
 して我艦隊は浮足立ちたる清艦と併行に進行し之を尾撃したるも日没
 し月黒く水雷に備ふる爲め注意して距離を保ちたる爲め敵艦の所在を
 見失ひ天明廟島に達し頼りに詮索を盡したるも見當らず乃ち昨日の戦
 場地に歸り揚威の委棄せられて既に人あきを見魚形水雷を以て之を撃
 沈したり
 清艦定遠經遠平遠は火災に罹りて銀狼を極め戦場内にある間は孰れ
 も鎮せざりしと云ふ

◎海戦々死士の十勇士名

赤城艦長

海軍少佐 從六位勳四等

鹿兒島縣士族

坂元八郎太

安政元年正月元日生四十二年

橋立分隊長

海軍大尉 正七位勳六等

富山縣士族

高橋義篤

安政五年五月十五日生三十七年

松島分隊長

海軍大尉 正七位

宮崎縣士族

志摩清直

安政五年五月廿七日生三十七年

橋立砲術長

海軍大尉 正七位

鹿兒島縣士族

瀬之口覺四郎

元治元年十一月廿五日生卅一年

秋津州分隊長

海軍大尉 從七位

滋賀縣士族

永田廉平

慶應二年六月廿五日生三十九年

松島分隊士

正海軍少尉

宮崎縣士族

伊東滿嘉記

慶應三年十一月九日生二十八

吉野分隊士

正海軍少尉

富士縣士族

淺尾重行

慶應三年八月十一日生二十八

比叡軍醫長

海軍大軍醫
正七位勳六等

愛媛縣平民

三宅貞造

安政元年十二月廿三日生三十一

比叡乗組

海軍少軍醫
正八位

和歌山縣士族

村越千代吉

元治元年八月三日生三十一

比叡主計長

海軍大主計
從七位

靜岡縣士族

石塚鑄太

明治元年三月十八日生二十七

●名譽の軍艦

海軍附近大孤山沖に於て清國軍艦と大快戦を試み世界の海戦史上に一大名譽を留めたる我軍艦を掲げんに

嚴島

海防鋼

四、二七八 一六〇

松島

海防鋼

四、二七八 一六〇

橋立

海防鋼

四、二七八 一六〇

吉野

巡洋鋼

四、二六七 二二、半

扶桑

甲鐵 鐵製
甲鐵

三、七七七 一三〇

浪速

巡洋鋼

三、七五九 一九〇

高千穂

巡洋鋼

三、七五九 一九〇

千代田

巡洋鋼

二、四四〇 一九〇

日清大戦

艦名	艦種	艦質	噸數	速力
秋津洲	巡洋	鋼	三、一五〇	一九、〇
比叻		鋼骨 木皮	二、二八四	一二、〇
赤城	砲艦	鋼	六三二	未詳

右十一隻軍艦の外御用船西京丸は一六五二噸なるが樺山海軍々令部長を乗せつゝ敵の彈丸を物ともせず船を揺かれ水雷に逢ふも尙自若として勇壯超群の働きを顯はし偉大の名譽を博したり

◎敗戦の清艦

艦名	噸數	速力	乗組定員
定遠	七、四三〇	一四、〇〇〇	三三〇
鎮遠	同	同	同
靖遠	二、三〇〇	一八、〇〇〇	二〇二
致遠	同	同	同

日清大戦

艦名	噸數	速力	乗組定員
來遠	二、九〇〇	一五、二五	同
經遠	同	同	同
平遠	二、二〇〇	一六、〇〇〇	一三七
威遠	一、二〇九	一〇、〇〇〇	一二四
揚威	一、三三〇	一六、〇〇〇	一三七
超勇	一、三三〇	一六、〇〇〇	一三七
廣甲	一、二九六	一五、〇〇〇	未詳
廣丙	一、二〇一	一七、〇〇〇	未詳

廣甲廣丙の二艦は廣東艦隊に屬す定遠鎮遠の二艦は東洋軍艦中の最大艦にして英國の東洋艦隊中にも之れと匹敵する者一艦あるのみ此二艦は何れも甲鐵にして鐵板の厚さは英尺一尺四寸各種の大砲十八門を乗す之れに當るに我は一半にも足らざる噸數の軍艦を以てす苦戦の程察して餘あり

日清大戦

◎撃沈燬燒の清艦

海洋島の海戦に於て我が艦の爲めに撃沈或は燬燒せられたる清國軍艦は悉く北洋水師の精銳と稱せらるゝものなり今最近の調査に従つて既明を掲げんに

來遠 巡航甲鐵艦 獨ステチン港ウオルガン會社製造

(排水二千九百噸實馬力三四〇〇(長さ二五六六〇(幅三九四八(深サ二三

〇三(船水一六四五(大砲砲台三珊三五口径二四七ミリ米突ホツキス五

管砲二此他四門(進水明治廿年(速力一五二五(定員二〇二

靖遠 巡航艦 英アームストロンク會社製造

(排水二三〇〇噸實馬力七五〇〇(長さ二五〇〇〇(幅三八〇〇(大砲機

砲一〇八寸口径後込大砲一〇(進水明治十九年(速力一八(定員二〇二

超勇 鋼製通報艦 水雷艇二 英アームストロンク會社製造

(排水二三五〇噸實馬力二六〇〇(長さ二二〇〇〇(幅三六〇〇(吃水一六

日清大戦

〇〇(大砲廿六噸后裝アームス砲首尾に二四十斤四九斤二機砲六進水

明治十四年(速力一六(定員一二三七

揚威 既明悉く超勇と同じ

(以上撃沈)

定遠 甲鐵フリゲート 水雷艇二 獨キール會社製造排水

(排水七四三〇噸實馬力六二〇〇(長さ二九八〇三(幅五三〇六(吃水一九

〇四(甲鐵合製板厚十四インチ(大砲三十珊半五口径クルツア四ホツキ

ス八十五珊クルツア二水電發射砲二野砲二進水明治十四年(速力一四

四五七(定員三二二〇

經遠 既明悉く來遠と同じ

平遠 巡洋艦

(排水三二二〇噸實馬力二五〇〇(大砲三(速力一六(定員一二三七

(以上燒燬)

合計 七艦 噸數二万零四百三十三同乗組定員一千三百三十七人

◎第一軍司令官山縣大將の檄

第一軍司令官山縣大將の京城に入るや第一軍に向て左の檄を發し以て其將士を戒勸せりと云ふ其軍令の嚴格ある規律の肅正なる想ひ見るべし

檄して各警むる 我が帝國軍隊の將校に告ぐ東洋の平和一たび破れ遂に亞細亞兩帝國をして兵馬の間に相見ゆるの已むを得ざるに致らしめしは實に古今未曾有の事なり我れは師を出すに名あり而して曲は彼に在りと雖其衝を争ふ雌雄を決するに及び苟も我軍隊にして最初の目的を達せず隨て全局勝を制する能わざらんば我が日本帝國二千五百有余年の名譽は一朝にして地に墜ち以て海外各國の笑を招くのみならず永く不測の大難に陷るも亦未だ知るべからざるなり國家士を養ふ正に今日の爲なり是固より將校諸君の熟知する處なりと雖余は今新たに 天皇陛下の勅命を奉じ軍司令官として來て此地に臨みたるを以て更に茲に

一言せざるを得ず

嗚呼我が將校諸君は忠肝義膽を有せり此地に進軍してより以來長きは數月短きは數旬に亘る氣候風土已に内地に同まからず道途又險惡にして宿舎は狹隘不潔或は露宿野處し加之百般の需用は缺乏せり然るに能く是等の艱苦を耐忍し一號令を下に勇往直前し以て敵國の首府を屠らん事を期するは蓋し將校諸君の須臾も忘るゝ能はざる所あるべし此れ我が士卒の忠肝義膽の熱血を瀦ぎ以て我が日本帝國の威武を宇内に發揚するは余が確信して疑はざる所なり

嗚呼我が軍隊は精銳剛毅なり曩きに陸には成敵の掃蕩占領あり海には豐島の轟沈捕拿あり初戦の勢已に此の如し兆吉なりと謂ふべし然りと雖も是れは初歩のみ前途は尙遠遠たり敵地は廣漠なり民人は多衆あり今日以往我が軍隊の負擔する所寔に重且大なりとす此際一二回の克捷を以て直ちに敵軍を侮慢するの心を啓かしむる可らき嗚呼將校諸君各其部下を戒勸し宜しく益々奮勵し進死を榮とし退生を辱とし撓まず屈

せき電撃驍騎一日も早く城下の盟を成し速かに 嵐標を安じ奉つるべき者なり
終りに於て尙一言す我が敵とする所の者は獨り敵軍とす其他の人民に在ては我が軍隊に妨害し若くは妨害を加へんとする者の外は我れ敵視するの限りにわらず軍人と雖も降る者は殺すべからず然れども其詐術に陥る勿れ且爾國は古より極めて殘忍の性を有せり戦闘に際し若し誤て其生擒に遇はば必ず酷虐にして死に勝るの苦痛を受け卒には野蠻慘毒の所爲を以て其生命を戕賊せらるゝは必然あり故に萬一如何なる非常の難戦に係るも決して敵の生擒する所となる可らざる深よく一死を遂げ以て日本男兒の名譽を全うすべし余は不敏なりと雖閣外の重任を承て將に諸君と事に従はんとするの始めに當り申告すること如此

京城に於て

第一軍司令官陸軍大將伯爵 山縣有朋

◎西京丸乗込樺山中將の奮戦

大孤山沖の海戦にて我西京丸が一運送船の身を以て精銳なる北洋艦隊の間に立ち奮戦激闘幸ふして其難を免れたるは稀有の働きなり今乗組員の談話なりと云ふを聞くに曰く
去る十七日(九月)午前八時頃西京丸は鴨綠江沖ある海洋島の北西端を距る北方三里の處にて針路を東北に進め八時三十五分頃北東二分の一東に變て進む同九時四十分赤城艦海洋島附近に敵のあらざるを報ず同十時頃に至り大鹿島を我左舷船首に見る然るに同十一時二十分に至り東北島に當り煙り見ゆるとの信號ありたれば敵艦の或は來航すべきかと思はしめたり同四十分頃敵の水雷艇及び艦隊見ゆとの信號あり次いで本艦及び赤城に向を左側に遣れとの信號あり戦場は大約北緯三十九度三十三分東經二十三度四十分の處に在り零時二十分頃旗艦より避けよとの信號ありたるを以て西京丸は敵に對せざる方向の左側に位置を占む戦争の將さに始らんとする前我軍敵を見出すが否や我艦隊は敵

をして遁逃する能はざらしむるが爲め先づ敵艦の遁路威海衛に去る海路を塞がんとして彼をして歸る能はざらしめたり故に敵の艦隊を已むを得ず決戦を取り我に進み來らんとせり

零時二十三分我艦隊より第一遊撃隊に對し右翼ある敵を迎へ撃てどの信號ありたり又四十五分敵艦は我艦に對して發砲したり同四十八分旗艦より適當の巨艦に來れば發砲を始めよとの信號ありたるを以て我も亦彼に對して發砲す一時七分三十分の巨艦に於て我より砲撃す始め我第一遊撃隊本隊及西京丸は敵の右へ右へ進み列を乱さきして進み行く是れ我戦團の始めあり此時西京丸は列の最後に從を行けり我諸艦は發砲しつゝ進行したりしが第一遊撃隊は已に敵隊を通過せしを以て西京丸は遁路を右舷に疊す此時清艦超勇我砲彈の爲め火災起れり赤城比叡は彼れれ定遠致遠來遠の爲めに逐はれんとす是は敵艦列を亂し止むを得ずして逐ひ來りしなり故に第一軍は更に左に廻り我本隊は右に廻り敵の艦隊を挾撃せんとす一時十四分敵の三十瓏半の砲丸我

機關室を買けり是より先き西京丸の左舷船首の方より右舷の後半部の處に在る端艇等を傷け天幕を破りて砲彈來れり十五瓏の砲彈をらん此砲片は甲板後部の處に至り風取及びマスホイールとナクル舵機の頭を傷け負傷者三名あり(此外戦團中十二名負傷す)

一時二十七分第一遊撃隊は敵艦及び水雷を逐ふて針路を左方に轉す此時我艦隊より第一遊撃隊來れどの信號ありたるを以て第一遊撃隊は本隊の側面に入る西京丸は遊撃隊と本隊との間に挟れたり

此時定遠或は致遠が西京丸の後より來り廣丙前より來りたり西京丸危険なりしを以て全速力にて退き第一遊撃隊の後少しく左舷の方に後進したり一時四十五分比叡は敵艦の爲め火災起り南方に避く赤城亦其後に從ふ敵艦三隻又之れを追撃したり依て本隊より比叡赤城危険の信號をなしたり西京丸は第一遊撃隊の背後に在り遊撃隊右舷に廻轉せんが爲め我的正に當り二時廿二分定遠より發したる三十瓏半の砲彈躍りて士官室の後より侵入し舵機に通ずる蒸氣管を碎きたり西京丸が受たる

砲弾は之を以て最大ありとす依て西京丸は我艦故障ありとの信號をなし秋津洲浪速の間を通りて敵側に出づ此時敵艦より猛烈なる射撃を受く西京丸はリービング・ブークスを用ひしも船を取る意の如くおざらるを以て速力を減じ更にハンドモーターを用務し全速力を以て進む此時敵艦揚威火災を起し大鹿島附近に在るを認めたり退は膠着せし者ならん二時五十五分平遠廣丙の一の巡航水雷艇を右舷船首三千メートルの處に認め我頻りに水雷艇に向ひ發砲す水雷艇は舵機を轉じて陸の方に向へば三時西京丸は平遠廣乙と五百メートルの距離に於て相砲撃せり三時十分一の水雷艇我西京丸船首より顯はれ西京丸に向ひて行進し正面の處にて船首發射管より水雷を發せしも中らず左舷船首五十メートルの處にて又一水雷を發せしも中らず此水雷は我船最も巧みに避けたるものにして前回の分は我左舷を前の方より横を水中に貫ぬきたるも我速力の爲め遙に側方に至りて發したり又後の分は我右舷に沿ふて通過したり是又遙に後邊に於て發したりとは彼のの水雷艇我前を通過し

たるに依て左右に別れしと云ふ三時三十分針路を南方に定む是より西京丸は戰團列外に出たり我西京丸は敵の堅艦平遠廣丙と激烈なる戰闘を爲したるものと知らる西京丸は此戰闘に就て多くの砲弾を受く是等の砲弾の爲に前の帆檣にも少しの傷を受け又通常上等室ある船の後部中段にも傷を受け居れり此上等室に於る發彈の爲に火災起りしも消止めたり之が爲め被服等を燒きたり敵彈三十顆半十五顆及小銃數彈を受け比例上多く我艦を傷けしにも拘らず負傷者の僅少なりしは號令操縦の宜しきを得たるものなり樺山命令部長は將校と共に始終號令台上りて敵艦を見下し彈丸雨注面を向くべからざる中に立ちて號令を爲し勇猛日頃に百倍し敵の堅艦と戦ひて遂に全局の勝利を奏したり又西京丸の報告する處あれば左に掲げん然れども奮戰の詳報と多少の重複を免かれず(讀者其心して閱讀あらん事を)

九月十六日午後五時吾先鋒隊及び本隊并に赤城及本艦と共に假泊地拔錨海洋島に向ふ

日清大戦

十七日午前八時海洋島を過ぎ針路を北東に變じ大鹿島に向ふ
午前十時大鹿島を左舷艦首に認む
同十一時二十分吾先鋒隊より東北東に當り煙見ゆとの信號あり
同十一時四十分敵の水雷艇及び艦隊見ゆの信號あり(但し艦隊十艘砲艦
二艘水雷艇五艘)
零時十分旗艦に倣ひ檣頭に軍艦旗を掲揚し砲闘の準備をなす
零時二十分旗艦松島より本艦に對し避けよの信號あり依て我艦本隊の
敵に對する裏面に位置を取りて進航す
零時五十分敵艦隊我先鋒隊に向て砲撃を始む我艦体亦た是に應戦す午
后一時五分頃に至り彼我艦隊互に砲撃最盛なるを見る
同一時九分より本艦打方を始む其距離大凡三千米突内外なりし
同一時十四分敵彈本艦の上甲板士官室を貫徹し本艦の左舷二十米突内
外の位置に落下す但し此敵彈は定遠若くは鎮遠より放發せるものから
ん而して我士官室並に其附近上甲板及諸室大なる破損を生ず同一時廿

日清大戦

七分敵艦一艘沈没せんとするを見る
同一時十四分吾先鋒隊は速力を大にして比敵赤城の救援に赴くを見
る
同一時五十五分比敵我れ火災の信號を揚げ南方に向て走る此時赤城亦
た其針路を比敵の左側に採りて走し敵艦三艘比敵を追撃せしも暫く
にして針路を轉じ赤城に向ひ追撃すること三十分餘後ち更らに針路を
變て彼の本隊に會す
同二時二十二分定遠鎮遠他一艘我を追撃し其三十珊半彈我左舷側を貫
き「サルトン」機械室の間に於て爆發し之が爲め同室及其の近隣數室「ス
カイライト」及「ハツチ」并に「パロメーター」「コロノメーター」「測器類食器類等
を擊破し最上甲板を貫き航機に通ずる蒸氣管を碎き爲めに蒸氣航機其
用をおさず依て直ちに我艦故障ありの信號を爲し當艦隊に離別し豫備
船索を用しも操舵意の如くならざるを以て速力を減じ「ハンドホイール」を
用意し更に至速力を以て前進すこの時大鹿島近傍に敵艦一艘を認む黃

煙を起し進退自由ならざるものゝ如く我其發射距離に近きしも發砲せ
 ば蓋し火災起りしものならん同時敵艦隊右舷大凡二千米突の位置より
 本艦を砲撃す敵彈一個左舷後部水線際を打撃し爲めに裂目を生し海水
 少しく侵入す但其力能く側板を貫徹するに足らざりしものならん依て
 木栓を以て一時防水をなし後ち側板の内面に當板を設け「セメント」を以
 て充塞す

同二時四十分敵の砲艦二艘（一艘は平遠一艘は廣丙）并に一の巡航
 水雷艇前方より來襲するに遇ふ我れ先づ同艇を劇しく砲撃せしに命中
 せしが彼れ倉皇狼狽の余激戦の方向に艇首を轉じ彼我艦隊砲煙の中に
 其体を失す千時砲艦二艘已に本艦五百米突内外の距離を通過せしを以
 て我れ全力を尽くして之を砲撃し命中せしもの二發を認む

同二時五十分更に我艦首に水雷艇一艘を認む我前進するに従ひ彼れ
 亦た我艦首に異向に進み來り同三時五分其艦首發射管より水雷を發射
 せしも少しく我左舷を通過す同三時六分該艇我左舷艦首大凡四十米突

の位置に於て旋回發射管より水雷を發射せしも我艦底下を通過せしを
 以て其効を奏せざりしは我が幸なりとす
 同三時敵艦一艘火災起り其火艦橋に及び進退自由からを將さに沈没せ
 んとするを右舷正横に見る

同三時三十分我が進路を南方に定む此時敵の水雷艇三艘北方より我を
 追跡する事殆んど半時容易に發射距離内に近逼する能はざるを知り艇
 首を返す

同三時五十分赤城の戦地に向て航行するに遇ふ
 同四時二十分先きに火災れ爲め列を離れたる比叡の戦地に向ふに遇ふ
 依て「損所如何」と信號を爲せしに「火災消ゆ」の信號を以て我に答ふ我
 亦假泊地に向ふの信號を爲し針路を定め十八日午前一時十五分投錨せ
 り

◎山田大尉の戦況實話

十月三日午後一時より山田大尉は平壤略取の顛末を參謀本部に於て演説したる大要を聞くに左の如し

騎兵の敗北

山田大尉が平壤攻撃の師團本部に到着したるは十五日(九月)午前七時十五分にして大尉は直ちに野津師團長に來着の旨を報じたる後師團長と共に師團本部の前ある某山上に登りたり同山は義州路の方に在る平壤の軍門を望見するに最も便利なる處なれば師團長は直ちに兩眼鏡を以て義州門を望見したるに遂に敵の騎兵六七十騎我軍隊の方位に向て進撃するの模様あるより各隊に傳令して戦闘準備を爲さしめ居る中敵の騎兵は頻りに我軍に向て發銃しつゝ進み來り我軍も亦之れに應戦し敵兵の過半を斃したり敵は之を見て直ちに左方に向て退却したるに恰も好し茲に我騎兵一中隊戦闘の準備を爲しつゝありたれば抜刀を以て大鳴喊敵中に奮進し僅かに六名を除くの外悉く之を斃したり暫くして敵

の騎兵殆んど二百六七十騎前敗に懲りず再び來襲の模様あるを以て我軍は充分戦闘準備を爲し敵の近くを待ち一齊に之を發銃し悉く之を斃したり此二百六七十騎の騎兵は所謂滿州騎兵として前進の騎兵の續々我銃丸に貫かれて斃るゝをものどもせせ死したる人馬を踏越へて發銃しつゝ前進し來り遂に二百六七十騎生歸せしものは一人もなかりしは敵ながら其勇悍なるには驚けり予は後とにて此斃れたる馬匹を點檢したるに其數二百七十六頭ありし

白布をのべたるが如し

第二回目來襲したる騎兵は何れも白馬にして其數二百六七十頭倒れたる有様は恰も白布を道路にのべたるが如し

敵の大砲の恐るゝものなし

敵の砲台より打出す大砲は何れも測度に拙なるが爲め砲丸は常に我軍

隊の頂上に飛びて遙か遠巨離の後ろに墜落するを以て雨の如く來りし大砲の彈丸も我兵中恐るゝものは一人もあらずりし

我大砲ハ悉く命中す

我野戰砲兵の發したる彈丸は悉く敵兵の幕營地に達し幾十となく張りたる「テント」を破らざるものは殆んどなく且砲台及敵の砲門を狙撃したる彈丸の如きは皆要處に命中し非常の好果を得たり

日清大戦中清軍の生擒



防禦工事の完無

平壤の防禦工事中特に驚くべきは彼の砲台にして其築造は滿州地方より輸送したる巨木と大石を以て頗る嚴重なる築造ありし之を守るの兵と戰術の拙なるは斯る砲台も何の効果を奏せざりしものなり

白旗を掲げたる兵多く射殺せらる

玄武門に向ひたる立見少將の一隊に向ひ白旗を掲げて降意を表し城内明波は明朝を期したり敵將は心ず夜襲の策あるべしと早くも察したれば我軍は彼れの請ひを容れ専ら戰闘準備に怠る嚴重に警戒したるに同夜の九時頃に至り彼れは夜襲にあらすして逃走し始めたれば我兵は兼て其遁路を扼し居る事なれば悉く之を射殺したり敵兵の死傷は此方面を以て第一とす死屍の積りて一ヶ所に多きは五十名少なきは三十名打重りて死したるは目も當てられぬ次第にてありし

◎竹内大尉遭難の顛末

九月二十四日台封附近にて東學黨の毒手に野りて無残の最後を遂げし竹内大尉が遭難の状況を聞くに當初台射兵站部に於て其沿道附近に東學黨蜂起の説ありしより其偵察をなさしめんとて商人跡に變装せしめたる本邦人二名及び韓人二名を派遣しせるに彼等は東學黨の處々に屯在して頗る不穩の状あるを探知したるを以て不取敢兵站部に報告せんと歸途に就きし中途端なく竹内大尉が兵六十三名を引さ連れ來るに會したれば兼て探知せる事實を報せしに大尉は然らば余自身之れを偵察し來るべしとて龍宮に至り府使の邸に入りしが東學黨之れを探知し府使の邸をば十重二十重に取圍みたれば兵士は發砲せんとしたるも大尉は未だ吾々に敵意あるや否や判明せざれば暫らく様子を見ふべしとて止先つゝある中無數の韓人闖入し來り劍に取付き銃槍を捕り行かんとするより大尉も今は黙し難く兵士と共に劍佩を抜き闘して切り拂ひ

◎大孤山沖の海戦實話

しも彼は衆我は寡到底免れ難きを察し名もなき奴輩の手に死するは恥辱の事なりとて自から軍刀を咽喉に突き立て勇ましき最期を遂げたるは惜みても尙餘りある事共あり
因に記す大尉は騎馬に巧みにして如何なる暴馬と雖一度鞭を加ふる時は唯々意の如くありしよしにて常に隊中第一の騎手と稱せられしよしあり軍旅多事の今日此勇士を失ふ誠に惜む可きあり

九月十六日仮泊地を發し吉野、浪速、高千穂、秋津洲を先鋒となし樺島橋立、嚴島、扶桑、千代田、比叡及西京丸、赤城を率ひて先づ海洋島に向ふ翌十七日午前六時三十分同島錨地沖合に至り港内を偵察せしめしに異状あり即ち大孤山大鹿島錨地に向つて進む
午前十一時三十分東北東に大舷艦首にあり居れり煤煙を認む數隻の汽船より發するものゝ如し即ち其必らず敵艦隊たるを察し衆勵して喜

日清大戦

ふ午後零時五分大軍艦旗を橋頭に揚げ各艦に令して戦闘の配置に就かしむ是に於て兵氣益々振ふ次で西京丸赤城艦本隊の右側より左側に移り避けしむ此時左舷艦首に於て二隻の敵艦あるを認む我先鋒隊先づ敵の中央に向ふが如く進み次に漸次左心に方向を變じ敵の右翼に向ふ本隊も亦略ぼ一の運動をなす時に敵の陣形は不規則なる單横陣か又後翼補陣なりしと認む而して定遠鎮遠中央に來遠經遠は其左右に靖遠平遠は又其左右に漸次小艦を兩翼に備へ艦數合して十隻なりき

零時五十分凡そ五六千米突の距離にて敵は先づ吾先鋒に對し發砲を始め吾先鋒隊は大抵三千米突内外に至り始めて應砲猛撃して敵の左翼を通す既にして敵の中堅は各艦首を我本隊に向け兩翼數艦は運動既に乱れて種々の方向を執り居れり吾に對して衝突を試みんとするもの如く且爾へ砲發し來る吾本隊は始終同一の陣形を保ち猛烈なる發射をなして直進す然れども殿後の比叡及扶桑は漸次向を來る敵艦に接近し比叡艦長は其儘直前せば或は敵の衝突を受けん事を慮り大膽にも艦首

日清大戦

を鎮遠經遠の中間に向けて其間を突貫し次で敵の數艦と戦ひ之を切り抜けて再び本隊に向ひ來る其狀頗る壯なりき此時本隊は既に敵を通過し漸次右方に轉じて敵艦隊の背後に廻るの運動をなせり而して敵の艦隊は既に所謂陣形あるものを存せざるに至れり(此時分陸地の方より軍艦及水雷艇出で來りて敵に加はるを見受く水雷艇は六隻軍艦四隻新たに加はりをももの如し)

是より先き吾先鋒隊は敵を通過して本隊に合するの運動をなせしが比叡赤城の已に大危地に在るを認めしが故に斷然方向を反轉して之を救ふ事に決し大速力を以て赤城と敵艦隊との間に向ひ以て敵を左舷に見て砲撃を通す故に此時は恰も好し本隊と共に敵を挟むの姿勢となれり

此間揚威は火煙を揚げて我前面を過ぎ大鹿島の方向に逃去するを見る已にして平遠の我前面を横切り左舷に來るあり盛に之を射撃せしが故に非常に混雜して終に火災の起るを認たり時に午後二時半過

日清大戦

あり此時廣丙も平遠の前面を陸地の方に向けて逃走するを認めたり又超勇は戦始まるや火災起り此頃は盛に煙を發し居たり而して來遠も亦此前後に於て火災を起したりと云
已にして本隊及先鋒隊定遠鎮遠其他數艦を挾撃す(此時定遠は前部に火災起る次で吾先鋒隊は逃走せし敵艦を追(結局來遠を打沈む)本隊は定遠鎮遠を攻撃す松島定遠と並びしとき其三十珊半砲の榴彈に前部砲台を射撃され砲台は勿論其近傍に大損害を被り且火を發す時に三時廿六分なり又此時三時三十分(於て敵の致遠又は靖遠の沈没するを認め此の如くする時鎮遠定遠は餘の諸艦と合し本隊と先鋒隊とは大に距り且つ漸く日没に接したるが故に終に戦闘を中止し吾先鋒隊を召還す時に午後五時半過かりき斯くて此時敵の狀態を見るに南方に針路を定め威海衛に向け逃去らんとするものゝ如し然れども夜戦は唯だ我本隊の混雜を招くのみならず現に敵は水雷艇隊を伴ひ居たるが故に之を求むるの不利なるを認め聖天明を待ち威海衛沖に於て彼が逃路を遮ぎるの

日清大戦

策を執るに決し諸艦(此時西京丸比叟)の成行き分らる唯僅かに東方に航走するを認めたりと云ふものあるを聞くを幸ひ凡る敵と平行せりと想像せる航路を執り以て天明迄航進せしに多く敵の隻影を見ず乃ち復た前日の戦場に引き返せしに(此時赤城は本隊を離れて仮泊地に歸航せしめたり)前日の戦地近傍に當て遙に煤煙を見しも其船体を見ざる内逃走りて所在を失へり即ち前日火災を發しおがら淺洲に乗上げたる揚威を破ふる爲め千代田に命ぞ外裝水雷を以て船底を破らしめ然る後歸路に就き十九日早朝終に本地に歸りしに西京丸及び赤城は己に安全に到着せるを見る比敵は一旦歸りて更らに出發本隊を索むる爲め海洋島を経て前日の戦地に向ひたるを聞けり
右は本隊及吾先鋒隊の戦闘の概況を而して此戦闘中西京丸と赤城は各自々然に本隊に隔離し各非常の危険に陥り一時西京丸は二艘の軍艦と二隻の水雷艇の中に陥り僅かに五十米突の所より水雷を放ち掛けられしも幸にして其水雷は水底を潜りて他側に出でたるを以て幸ふじて沈

没の難を免がれ且艦体烟突氣管其他に殆んど無數の彈丸を蒙りたるも幸にして破壊の患を免かれ單獨に仮泊場に歸るを得たりと云ふ而して赤城も亦一時敵の重圍に陥り非常の苦戦をなし終に艦長以下十名は斃れ二十名は負傷し「メイマンスト」は折れ到底破壊沈没を免かるべからずと思惟せしも一番分隊長及航海長は傷痕に屈せず巧に艦を運轉して戦場裏より退き凡そ三四時間の後再び本隊に歸復せしは感ぜるに堪へたりと云ふべし又比敵は前記苦戦中二個の水雷を仕掛けられしも幸に命中せず然れども盛に射撃を受け損害甚だ多く士官室に中りし榴彈の如きは一時に軍醫長小軍醫主計長看護手其他負傷看護の部員并に機関砲庫員及豫備砲索員を斃したりと云ふ且つ火災を起したるを以て終に本隊と連動を共にするを得ず即ち一先づ仮泊地に歸り負傷者を運送船に托し海門と共に戦地に向ひしと云ふ而して同艦は昨朝歸航せり

戦闘の結果は經遠致遠或は靖遠揚威超勇の破壊沈没定遠來遠平遠の大

火災にして其他の諸艦にも大損害を興へたるは殆んど驚を容れざる所あり
我艦隊死傷及損傷は別紙各艦よりの報告に依て詳おかり松島並し損傷中の最も甚しきものなり
終に臨み特に稟報すべきは士官下士は言を俵たせ水兵火夫其他従僕に至るまで滿面喜色を帯び砲丸乱下鉄板裂け血雨降り骨砕け肉飛ぶの場合に際するも神色自若として活潑靜慮に各其戦闘の職分を尽せし一事なり而して此事に關しては各艦長の云ふ處殆んど符節を合するが如し眞に愉快に堪ぬざるありと報し來る伊東司令長官の心中左こそ喜悅を以て満たされしるなべし

◎赤城艦長の名譽

明治廿七年九月十六日帝國名譽の軍艦赤城艦は本隊及我先鋒隊と共に仮泊地を出で海洋島に向ふ十七日午前六時五十八分旗艦の命により海

洋島家登島に入り幕内を視察す十一時十五分大孤山沖地方位に於て敵の艦隊を認む午後零時廿分戦闘配置に就く一時九分打方を始む此時定遠鎮遠の二艦正に我左右に在り我艦之れと戦對砲撃頗る力む是れより先き旗艦の命に依り艦隊の左側にありしも船の速力之に續行するに堪へざり不知不諱孤立の勢をふせり同時廿分頃敵艦來遠及敵の左翼諸艦本隊に向ひ突進し來り其巨艦僅に八百米突に達し我右舷砲は之に對し猛烈なる射撃を行ひ來遠をして艦橋上人なきに至らしめたり此時一番分隊長海軍大尉佐々木廣勝負傷海軍少尉候補生橋口戸次郎戦死す依て航海士兼分隊長海軍少尉兼子昱佐々木大尉に代つて後砲台を指揮す同時廿五分敵の諸艦我艦尾を通過せしが敵砲我艦橋中り艦長海軍少佐坂元八郎太以下一番速射砲員二名即死二名負傷す航海長海軍大尉佐藤鎮太郎艦長に代つて戦を督す此時我前部下甲板に中りし敵砲は前部彈庫及防火隊員四名を斃し一名を負傷せしめ「スナームパイプ」を破壊し去れり又前部下甲板に破壊せし他の一砲は砲筒砲員二名捕索手一名を斃せ

り既にして我艦尾を通過し去れる來遠致遠及び廣甲の諸艦我を追撃し來らんとするも「スナームパイプ」破壊せるが爲め前部砲彈藥の供給茲に杜絶し強て配給を行はんとせば勢ひ送風機れ用廢せざるを得ず送風機の用廢すれば速力を減する事甚しからざるを得ず進退殆んど谷るの悲境に陥りしか我艦々首を左方に轉じ敵艦と相去る稍遠きに至るを機とし機關長海軍大機關士平部貞一以下機關部員のみしたる應急修理其功を奏し甚だしく速力を減せざるを以て俄かに敵艦の接近するの不幸に會せざり難きも敵の諸艦は愈々速力を早め切りに我艦を追躡し來るを以て不止得針路を南方に轉じつゝ盛んに艦尾諸砲を發して其追撃を止むんことを計り一番速射砲の如きは信號兵を配して發射を續行せしむるに至れり既にして敵砲我大橋に中る數發にして該橋を倒壊し去るを以て直ちに軍艦旗を前橋に掲げ捕索手員をして切斷せる大橋頂に旗竿を立てしめたり二時十五分來遠以下諸艦は既に我艦の後方三百米突内外の位置に達せしが來遠の放てる彈丸は再び我艦橋に中り航海長を負傷

せしめたり此時艦尾砲員砲撃最も勉む二番分隊長海軍大尉松岡修藏代
て戦を督し電砲長海軍上等兵曹進藤多榮治松岡大尉に代て前砲台を指
揮す同時二十分我艦尾四番砲の彈丸來遠の後部甲板に命中し該艦をし
て烈しき火災を起さしめたり敵の諸艦は該船を救んが爲め速力を減じ
て該艦に集りたるを以て我艦は漸く敵を去る七八百米突の所に達する
事を得たり同時二十一分航海長治療終り再び艦橋に來り松岡大尉に代
れり同時三十分敵艦を去る既に遠きを以て兵員の休止を命じ速力を緩
め「スチームパイプ」の修繕に掛れり此時遙かに我本隊は來遠鎮遠を猛撃
しつゝ近づき來るを見之れに合せんが爲め針路を北方に轉せり同四十
分軍事點檢を行ふ兵員を補充し續て休憩を命せり四時五十五分「スチー
ムパイプ」復修復終りたるを以て全速力を命じ五時五十五分本隊と會せ
り
海洋島沖の海戦如何に激烈なりしかは一讀一想以て詳細を悟る事を得
しからん

◎義州の敵を撃破す

第一報
追撃軍の前哨斥候は義州を距る一里の地に於て敵の騎兵を認め互ひ
に放火を開始し結局敵は鴨綠江右岸に向つて敗走せり

第二報
我騎兵は義州に於て敵の騎兵に衝突し射撃中歩兵之を援け敵兵遂に
江北に退却したり

第三報
我兵一中隊及騎兵若干は去る八月在義州の清國偵察兵に衝突したり
而して敵は鴨綠江を渡りて逃走せり
鴨綠江の右岸には清兵の遺體百五十餘あり

第四報
敵は初め義州に於て防戦せんとし二千五百人餘を分遣し防禦工事を
施したれども皆破壊して退却せり我兵の衝突したるは約百五十の騎

兵一隊のみ義州は全く我軍の有に歸したり

第五報

義州に於て敵の斥候隊と衝突したるは第五師團の騎兵一分隊と歩兵二中隊あり

第六報

鴨綠江右岸の敵は一万二三千江の上流及下流に於て十數の砲臺あり其力甚だ大ならず

第七報

我軍は直に右岸に出で、敵を殲滅せんとす
平壤大捷戦以來精銳北進の我軍は些かの衝突ありしのみにて既に義州を占領し敵は鴨綠江を隔て、北部に退きたる事明白なる事實なりとす

●第一軍鴨綠江畔九連城の大勝利

十月二十三日佐藤大佐の枝隊本口鎮の上流にて鴨綠江を徒涉し敵の歩

兵三百人騎兵六十人を破りて敵背に出づ軍を二十四日夜義州城外に於て潜に鴨綠江に架橋し二十五日夜明より第三師團軍橋を渡り右翼前面虎山に據りたる敵と開戦し大迫旅團長右翼の峻嶺に登り敵の側面を瞰射するに及び敵遂に支る能はず九連城の方向に敗走す此時敵の四縱隊旗を並べて猛進し來り我正面の山上に登りて猛烈の射撃を爲し我兵大に力戦す此時立見少將其旅團を率ひ虎山の左翼を迂回して敵の背後に出で烈しく其側面を衝き大に敵を窮追し緩河を徒涉して敵の幕營を奪ひ大砲十門を分捕し此夜第三師團と共に九連城背後の要地に露營せり亦當師團の前衛も此附近に露營し我は軍司令部と共に虎山の東北に宿營せり此夜敵我陣地に向ひ頻りに大砲を亂射す二十六日朝四時半より第三師團と共に三道より敵の背後に迫れり然るに敵は夜明迄に逃走せし故我軍直ちに之を占領し當師團は鳳凰城及大東溝に向て追撃兵を出せり敵は九連城附近の要地に堅固の防禦工事を爲せり其兵大連灣旅團口小站蘆臺等の精兵にして宋慶之を總督す凡そ十八營なりと我軍死傷

將校七名下士以下七十名敵の死者百余名分捕大砲三十四門大小銃砲彈藥及び天幕無數ありと我軍の勇猛なるは今に始めぬ事ながら九連城は敵の根據地として守備嚴なる處なれば我軍隊の攻撃を試むるに當り頗る困難ならんと思ひ居しに計らざりき斯く容易に陥落せんとは陸軍萬歳帝國萬々歳

●第一軍の配置と敵の勢力

第三師團の一小部隊は昌城附近に於て疾く鴨綠江の右岸即ち滿州に入れり
其一部隊は平壤より朔州に出で水口鎮より鴨綠江を右岸に渡る是即ち佐藤枝隊
其一大勢力は龍川に於て軍司令部の旗下に屬し鴨綠江の下流より彼岸に達す
他の一大勢力は義州より遼か南方に於て一種の役務を執る

第五師團の第十旅團は混成旅團として中央より直進して正面の攻撃に任ず

其第九旅團は殿後にありて他部隊に次で前進す
敵の勢力は鳳凰城盛京沿岸及鴨綠江畔に於て七万五千と稱せども實數は之より遙かに少なく又九連城附近より鴨綠江畔に至る各地に分屯する兵力は約二万以上にして此内には平壤の敗兵も少なからず其携帶する兵器も稍良好にして亦鳳凰城以北守備兵の比にわらず去れば愈々總攻撃に着手せし上は我軍も多少彼等を盡殺するの仕業はあらん

●九連城の敵將

九連城に強大なる防禦工事を施し二万内外の大兵を率ひて之を守りながら一二回の小衝突に勝を奪はれ我軍の實力如何を見極る事も出来ず
に敗走したる清國の弱將の官職姓名を擧ぐれば左の如し

四川提督我中將相當官

宋

慶

河南河北鎮總兵(我少將相當官)

劉 盛 休

●第二軍の上陸

山縣大將が率ひたる第一軍は既に九連城を乗り取りたり而して大山大將の引ひたる第二軍は愈よ去二十四日より清國盛京省の東南岸魏子窩の附近に於て上陸を初めたり

該軍は海面に大艦隊の掩護を受けしを以て更に之を顧るの要無く又陸地に於ては無論敵の強撃を受けるならんとの見込にて豫め充分の用意を爲したれども幸をにして格別の攻撃を受けざりき

敵の攻撃格別ならず風向も至極よろしかりしを以て三日間に滞り無く上陸を了れり

●魏子窩の地勢

魏子窩は前に襄長山列島を控へ旅順と盛京省東南海岸を経て九連奉天

に通じ又分岐して遼東灣に沿ひ牛莊より奉天北京に通ずる最も緊要の地點にして遙かに關東半島の牽制地たり

吁我軍隊は遠く異境に踏入り陸には艦隊整々として攻圍進撃を試み一蹴して成歎牙山より平壤を陥れ海には艦隊堂々と虚實を斗りて一撃の下に豊島黃海の轟沈を奏す 天皇陛下の威徳と忠勇なる軍人の勳勞によりしして何ぞ克く偉功を灼す事を得んや以て國威を發揚し以て帝國の榮譽を輝すを得んや且や日本國民は一種特有外國無比の大和魂を備ふるに依り國難に殉し君主の爲めに命を致す事兒童走卒に至る迄數へざるに已に既に覺悟する所あり斯る至大至剛の精神を以て今日其局難に當り死力を盡して他を顧るなき速戰速勝亦理りなる爾爾來海陸兩々進んで奉天を衝き北京を略すの絶快ある報を手以せば綴りて以て冊子とし讀者と共に萬歳を誦はん

明治廿七年十月三十日印刷
明治廿七年十一月八日發行

發行者 山崎 曉三郎

東京淺草區小島町十番地

印刷者 大場 沃美

東京神田區柳原河岸第十一號地

發賣元 國華堂

東京淺草區小島町十番地

